

---

# 夏に吹く春の風

JUN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏に吹く春の風

### 【Nコード】

N1737C

### 【作者名】

JUN

### 【あらすじ】

桜が消えた。その事実を俺は受け止められず春奈もいない家で無気力に過ごしていた。そこで突然親父から電話かかってきて・・・？前作、『春の訪れ』のヒロイン、春奈の個別ルート！

## 第一話（前書き）

ストーリー分岐、春奈ルート！まずはやっぱり春奈ツス。特に説明はないので『春の訪れ』見ないと話が全くわからないです。

## 第一話

桜がいなくなつて五日程は過ぎた気がする。

気がするというのはあまり明確に覚えていないからだ。

何をするにも無気力で失敗ばかりしている。

信や綾乃や美姫、雪華もこの事は知っておくべきだと判断して俺は話した。

信は話が終つたら直ぐに消え、綾乃は怒り、美姫と雪華は泣いていた。

全く罪作りな奴だよな、友達みんな困らせて。

だが、それ以外にも俺は怒られた事があつた。

それはその日登校した時だった。

「潤、あんたちちゃんとご飯食べてるの？」

「何だか森神君、顔色悪いよ？」

いつものように教室に入ると開口一番そんな事を言われた。

「ちゃんと食ってんぞ。コンビニの弁当。」

それを聞いた綾乃と美姫は驚いた顔をしたが、すぐに怒り出した。

「駄目じゃない！コンビニ弁当じゃー！あんた料理出来るんでしょー！？」

「そつだよ、森神君。バランス考えなきゃ体に悪いよ。」

詰め寄る二人は凄じ剣幕でまくしたてる。

まあ、まず落ち着こうじゃないか。

「仕方ない。何だか家に一人していると色々考えちまうんだよ。」

美咲が死んで、桜が消えて、春奈も今はいないんじゃないじゃすげえ無気力になるんだよなあ。

あー、そういえば、春奈いつ戻ってくんたる？

「そついえば春奈ちゃん、いつ帰って来るの？」

俺の気持ちを代弁するかのようには美姫が聞いてくる。

親父が電話では二、三日と言っていたがもうかれこれ一週間になる。

流石に心配になってくる。

「わかんねえ、今日電話してみるよ。」

そう言うと俺は机に突っ伏した。

何だか妙に眠いのよ・・・

俺が意識を手放そうとした時、二人の呆れたような声が聞こえた。

・・・。

「あー、今日はよく寝たなあ。」

学園が終わって一人きりの帰り道で俺は呟いた。

今世紀最大の爆睡だったぜえ・・・

そんな事を考えながら歩いていると、いつの間にか家に着いていた。

「ただい」

トゥルルルルル

そんな時、滅多に鳴らない家の電話が鳴っていた。

「はいはい、今出ますよつと・・・はい、森神です。」

「へるー、我が息子よ。」

あー、やっぱりこの声聞くとイライラするなあ。

切っちゃってもいいですか？

「で、何の用だ？」

「わお、いきなりの冷たい反応。まあいいや、突然だけど明日学園休んでこっちに來て。」

いきなり電話してきたと思ったら、何を突然言い出すんだこの親父は・・・

俺は切りたくなる衝動を必死に抑えて、溜め息混じりに聞き返す。

「何で？」

「何でも。」

くっ・・・親父に普通の返答を期待した俺がバカだった。

まあいいか、なんだかんだで学園休めんだし。

「……まあいいけどさ。ところで春奈は？ちよい代わって。」

そう言うと何故か親父は言いにくそうに言葉を詰まらせる。

「あー、んー、春奈ちゃん、今風呂。だから無理。」

風呂だあ？こんな夕方から風呂に入る奴だったか？

「……潤。」

電話口からいつになく真剣な口調で親父は俺を呼んだ。

いつもと違う声色に不審に思い、俺は聞き返す。

「なんだよ？」

「春奈ちゃんの事、どう思ってる？」

何故にいきなりそんな事を言うのか？わけわからん。

「・・・答える必要性が感じられん。」  
「いいから。」

はあ、なんで親父にそんな事言わにやならんのだ。

だが、引き下がりそうもないので仕方なく言う事にする。

「・・・世話がかかる妹のようだけど俺の大切な家族。あいつにはもう家族がないから俺がずっと家族でいてやるって決めただ。」  
「・・・」

親父は黙ったまま何も答えない。

いや、何か言えよ。思い切ってカミングアウトしたのが恥ずかしくなるじゃねえか。

「・・・それだけ？」  
「いや、それ以上でもなきやそれ以下でもねえよ。」

そう言つと、親父は何か言いたげに唸り出した。

この親父がわけわからんのはいつものことだが、今日はいつにも増してわけわからん。

「……まあ今ほそれでもいいか。でも、こっち来たら改めて考え直せ。」

「何でだよ？」

「何でも。」

うわっ、殴りてえこの糞親父……

人の神経わざと逆撫でしてるとしか思えん。

「じゃ、待っているぞよ、我が息子よ。」

「いや、ちょっと、まっ」

プツッ、ツッ、ツッ

言いたいことだけ言って切りやがったあの親父。

まあいい、俺も親父や春奈には話がある。

「……はあ。」

思い出しただけで憂鬱になってくる。

桜が消えた事、あれは本当に消えなければならなかったのか。  
もっとやりようがあったんじゃないのか。

だが、今となってはもう過去の事。変えようもない現実。

「なら、俺はこれからどうすればいいのか……」

わからない、ただ落ち込むだけじゃ、桜も美咲も浮かばれない。

それに美咲とした二つの約束もある。

幸せになるという事。絶対に忘れないという事。

二人は俺の幸せを願ってくれていた。

俺が幸せになり、二人をいつまでも忘れないという事は二人にできる唯一の恩返しになるんだろうか……

だが、これだけは誓おう。

俺が幸せになろうがなかろうが、どんなことがあっても二人をずっと忘れない。

「……よし、今度あの桜の木を見に行こう。」

そこで、みんなと花見なんかしたりすればきっと楽しい。

「さーて、そうと決まれば、明日の準備でもすっかな。」

そこで俺はふと気が付いた。

「……超時間かかんじゃん。」

準備やら切符やらの時間を考えるとすぐにやらなきゃ、あっちに着くのは夜になっちまう。

「まさか、あの親父……わざと……?」

よくよく、考えれば電話なんて昨日の夜にするか今日の朝にすれば済むこと。

そうだ、殴りに行こう。

俺は殺意を巻き散らしながら急いで、準備に取り掛かった。

## 第一話（後書き）

意外と早く更新出来た今日この頃。ところでそれぞれのヒロインの  
小説の名前には最初に『夏の〜』とか『夏に〜』とかが付いてて、  
ヒロインの名前の一部が組み込まれています。

ちなみに次に書く美姫ルートの小説の名前は『夏の日の姫』の予定  
です。

## 第二話

俺は今、次々と変化していく窓の暗闇の景色を眺めている。

親父の電話の後、直ぐに準備し、直ぐに夜行列車の切符を買い、今に到る。

もう時間は一時を過ぎているが何故かなかなか寝つけない。

「しかし、あの親父は何であんなこと言ったんだろうな。」

春奈をどう思っているか・・・か。

去年の夏に春奈と出会って、またこっちで再会してから色んな事があつたよなあ。

「ホントにあいつがいたおかげで気が休まる日がなかったよ。」

でも、退屈はしなかったかな。あいつが来てからのドタバタな日常は思い返すと苦笑しかできんが・・・

何だか無性に春奈に会いたくなってきた。

こんな事春奈が知ったら、やっと私の愛を受け入れてくれるようになったんだね！とか言われそうだが・・・

「・・・寝るかな。」

ようやく眠くなってきたので、俺はあつたかい気持のまま眠りにつ  
いた。

・・・。

次の日、夜行列車から降りた俺は久しぶりに通る道を懐かしく思い  
ながら歩いていった。

歩いて十分程した後、ばあちゃんの家に着いた。

「こんちわああああ!!!?」

チャイムを押して、玄関に入った瞬間いきなり投げ飛ばされた。

俺の体はそのまま弧を描きながら床に落下。

「ぐほあ!!!?」

やべえ、意識飛びそう・・・。

俺は飛びそうになる意識を何とか繋ぎ止めて、フラフラと立ち上がる。

つか、出会い頭にこんな事するのは一人しかいねえ。

「げほっ、ごほっ……こ、このクソババア……」

眼前に佇む我が祖母 もりがみさち 森神幸は無表情で俺を見ている。そして……

「遅い!!!」

第一声がそんな言葉だった。

「俺だつて昨日親父から電話もらって夜行列車ですぐ来たんだよ！  
！つか、会った瞬間一本背負いつてなんだよ!!!」  
「煩い!!!二秒で来い!!!」

んなむちゃくちな……お隣さんでも到底無理だ。

ばあちゃんは怒りの顔をまた無表情に変えて無理矢理俺を引っ張る。

「ち、ちよつと待て!自分で歩ける!!!」

俺はばあちゃんの手から抜け出そうと試みるが全く外せない。

どんな怪力だ、このオババ……

「ぐおっ!?!」

居間に着くと俺の体はまた投げ飛ばされた。

そこには親父と母さんが神妙な面持ちで座っていた。

「ってて……あれ? 春奈はどうしたんだ?」

さっきからどこにも春奈の姿が見当たらない。

この家に着いたら真っ先に春奈に会うと思っていたのだが……

「……春奈ちゃんは今いない。」

珍しくマジな顔をしている親父が口を開いた。

「何? 買い物とか?」

俺は姿勢を正し、座布団ひいて親父に問いかけた。

だが、今度は母さんが口を開いた。

「潤、よく聞いて。今春奈ちゃんは春奈ちゃんの叔母さんの所にいるの。」

「え？」

春奈の叔母さんってあれだよな。自分勝手な理由付けて春奈を追いつ出した奴だよな。

そんな最低人間の所に春奈が何の用で行ったんだ？

「僕達が母さん　おばあちゃんから春奈ちゃんの話聞いて春奈ちゃんを引き取ったのは聞いているな。」

「ああ。」

追い出された春奈をばあちゃんが保護して親父達が春奈の里親になった事は、実際には一ヶ月程しか経っていないのに随分懐かしく感じられる。

最初聞いた時はどうやって親父の息の根を止めようかと考えたが今は感謝している。

「実は最初、春奈ちゃんがあの人に馴染めてから里親になる手続きをしようと思っただ。

で、それを見るために帰って来たんだ。どうやら春奈ちゃんは上手く馴染めたみたいだからここに来る前に審議会とかその他もろもろに行ってきたんだが・・・」

「春奈ちゃんの親権はまだ春奈ちゃんの叔母さんが持つてるみたいで出来なかったの。」

それで、親権を得ようとその叔母さんの所に行こうとした矢先に・・・」

「突然その叔母が家にやって来て春奈ちゃんを連れていったっていうわけさ。」

いや、親父達の言ってる意味が全くわからない。

何故今になって春奈を連れていったのか、何故春奈の親権を未だに手放していなかったのか、わからない事だらけだ。

だが、やるべき事は分かっている。

「だったらすぐに春奈を連れ戻すべきだろ！！」

だが、俺がそう言っても大人三人は立ち上がろうとしない。逆にはあちゃんに座れと言われてしまった。

仕方なく、俺はしぶしぶながらも座る。

「いいかい？今無理矢理春奈ちゃんを連れ戻してもまた同じことの繰り返しだ。」

「でも、突然春奈を追い出すような奴だぞ！今頃何されてるか分かんねえじゃねえか！！」

そうだ、とにかく春奈に会わなきゃ、ここでぐずぐずしていても何も始まらない。

「・・・俺、春奈に会ってくる。」

「だから、感情的になるなと・・・」

「会っただけだから。」

俺はそう言って部屋を飛び出した。

春奈に会いたい、その一心で・・・

・・・。

まだ日が昇りきっていない時間帯に俺は近くの商店街まで来ていた。

「つーか、俺家知らねえ・・・」

しまった、家の場所くらい聞いておくんだっただなあ……

だが、今更だし、戻っても教えてくれなさそうだし、まあいいか。

とりあえず、俺は適当にその辺を歩く事にした。

「ん？」

商店街の中を歩いていると、ふと魚屋に目が止まった。

そういえば、春奈と買い物してる時に魚屋の親父に最早定番のセリフを言われたんだっけな。

『よお！春奈ちゃん！今日は彼氏と買い物かい？』

『ううん、彼氏じゃなくて、夫です』

とか何とか言ってたんだっけな。その時の俺は周りの視線が痛くて逃げ出したんだが……

と、そんな事を思い出していると、隣の買い物に来ていたおばさんと魚屋の奥さんらしき人の会話が聞こえてきた。

「そういえば知ってますか？最近久代さんのお宅に若い女の子が住んでるんですって。」

「へえー、それはまたどうして？」

俺はその会話に神経研ぎ澄まして聞耳立てていた。

「何でもその女の子の親が亡くなって、久代さんが親代わりなんですよって。」

親代わりだあ？自分勝手な都合で春奈を追い出した奴が？ふざけんなよ……

そう思いながらももう少し話を聞いてみる。

「でも何だか夜にあの家の近くに行くと変な音が聞こえてくるのよね。ドタン、バタンとか。」

「それって……もしかして……あれ？」

「うん……多分……」

「あの！」

俺はもう我慢出来なくなつてその人達に話しかけた。

おばさん二人は不審そうな顔をして俺を見る。

「あの、俺その女の子の友達なんですけど、その久代さんの家がどこにあるか教えてくれませんか？」

「え、ええ、別にいいけど……やめといた方がいいわよ。久代さんって評判悪いし、何されるか……」

分かっている、でも今の話が本当なら春奈をこのままにしておけない。

だが、その時魚屋さんの奥さんが俺の後ろを見た。

「あら？あれじゃないかしら。その女の子って。」

「えっ!?!」

俺は直ぐ様後ろを振り向いた。

そこには遠目から見ても以前の雰囲気とはまるで別人のような春奈がいた。

「春奈!?!」

俺はおばさん二人を置いてすぐ春奈に駆け寄る。

春奈は俺を見上げるが、その目には生気が宿っていない。

「春奈……」

「……潤……君……?」

その時、初めて春奈が反応を見せた。

俺は春奈に必死で呼び掛ける。

「春奈、俺だよ。分かるか？春奈……」

「……潤……君……」

春奈の目にだんだんと以前のような輝きが戻ってくる。

そして、その目から涙がポロポロと流れ落ちていく。

「……潤君……」

「うわっ!?!」

もう何度目かわからない春奈の突然の抱きつき。

だが、今度のは春奈の辛かった気持ちが伝わってくるようで、何だか悲しかった。

「ふええ……うつく……ぐす……寂しかったよお……辛かったよお……」

「うん……頑張ったな……」

俺は春奈の頭を優しく撫でる。少しでも辛かった時を癒すように。

俺は春奈が落ち着くまで撫で続けていた。

## 第三話（前書き）

夏シリーズはそれほど長々とはしないつもりです。書いたとしても多分十五話くらいかと思います。

### 第三話

「うん、潤君の匂いも満喫した事だしそろそろ帰るね。」

「おいおい、お前が帰る場所は俺んちだろうが。」

「……………」

春奈は押し黙って、背を向けてしまった。

ここからだとその表情までわからない。

「…………絶対にな、帰るから。いつか、潤君の元に……………」

「春奈！」

ろくに挨拶もしないまま春奈は走って帰ってしまった。

結局、会っただけで何もできなかった。

追いかけるようにも、家は知らないし、さっきのおばさん達ももういない。

「春奈……………」

俺は春奈が走っていった道を、ただ見るだけしかできなかった。

.....。

春奈と別れてから俺は自分がどこをどう歩いたのか覚えていなかった。

気が付いたら、春奈と出会った公園にたどり着いていた。

思えばここから全てが始まった。

ここに来たら急に春奈がぶっ倒れてかなり焦ったんだっただけ。

一年も前の事だから随分と懐かしく感じる。

「春奈か.....」

俺はブランコに座って春奈の事を考える。

少し前までずっと孤独だった女の子。そして、今また同じことが起きようとしている。

あいつをまた独りにしちゃいけない。それだけは絶対に。

もう一度、俺の悲しみなんかぶつとばすくらい幸せそうな春奈の笑顔が見たいから.....ずっと、あの笑顔を見ていたい。

「……そっか……俺……いつの間にか春奈が好きになってた……」

春奈の隣ですっとあの笑顔を見たいというのはつまり、俺は春奈を好きになってるんだ。

「ああ……とうとう気付いちまったよ……」

一度そう思ってしまつと、もうその気持ちに歯止めが効かなくなる。

春奈に会いたい……好きだつて、伝えたい……

でも、そうするのは全てを片付けた後だ。そうしたら、春奈に伝えよう。

「よし、とにかく今は帰ろう。」

俺はとりあえずばあちゃんちに帰ることにした。

……。

「春奈を助けたい！どうすればいい!？」

家に戻るやいなや、俺は親父に頭を下げた。

親父は一瞬キョトンとした顔をしたが、やがて真剣な面持ちになった。

「春奈ちゃんに、会ったのか……」

「ああ、商店街で偶然な。」

「元気にしてたか？」

俺はさっきの春奈の様子を思い出す。

俺に会うまでの春奈は目に生気が宿ってなく、まるでボロボロの人のようだった。

「元気じゃ……なかった……」

「そうか……」

俺は手を握り締めて歯を食い縛る。

結局会っただけで何もできなかった自分が情けない。

俺と親父はしばらくの間黙り込んでいた。

「昨日も聞いたけど、もう一度聞いておく。お前にとって春奈ちゃ

んはどんな存在だ？」

親父は唐突に昨日と同じ質問を俺にしてきた。

俺は今の素直なままの気持ちを親父に話した。

「大切な家族。それはこれからも変わらない。」

俺は目を閉じて春奈の事を思い浮かべる。

「……でも、俺は春奈を一人の女の子として好きだ。春奈の隣でずっとあの笑顔を見ていたいし、ずっと側にいてやりたいと思う。」

親父は俺の素直な気持ちを聞くと、満足そうに笑いだした。

「ハッハッハ、ようやく自分の気持ちに気付いたか、我が愚息よ！」  
「潤。」

突然後ろから声がして、振り向くとばあちゃんと母さんが立っていた。

ばあちゃんは俺に近づいて俺の顔を覗き込んできた。

「な、何だ？」

「・・・うん、良い目だね。それでこそ、我が愚孫だ。」

「くあゝ！人を愚息だ愚孫だなどと！！この糞親子ー！！」

俺が声を荒げると親父とばあちゃんはニヤリと笑い、母さんはあらあらと笑っただけだった。

そしていよいよ、森神家春奈奪還作戦が開始されようとしていた。

・・・。

午後から俺はまた一人で外に出てきていた。

家を出る前、いきなりばあちゃんは俺に、とりあえず様子見てこいと家を追い出されしぶしぶ教えられた場所に向かっていた。

春奈の家は商店街から少し歩いたところにあるらしい。

周りの景色を眺めながら歩いていると、ボロい一軒家が見えてきた。

「あれが・・・春奈の家・・・」

春奈の悲しみがいっぱい詰まった家を俺は眺める。

あんなところに春奈がいると思うと、無理矢理連れてきてしまいうことになる。

だが、俺は何かその気持ちを抑えて春奈の家に近づいていった。

「……………」

とりあえず普通に家の前を通り過ぎてみたが特に変わった点はない。

でも、なんだろう。俺が変に意識しているのか、妙に静かで逆に不気味だ。

「隊長、敵も人質の姿も確認できません。」

そう呟く俺を通り過ぎていった人が痛いものを見るような目で見えてきた。

んだよう、そんな目で俺を見るなよ。こちとら真剣なんだっつーの！

俺は不自然に見えないように携帯を取り出し電話をするフリをする。

それから、しばらく時間が過ぎ、何も変化が起こらないので一旦その場を離れる事にした。

「ふうー、さて、どうしたもんかな。」

俺は偶然近くで見つけた喫茶店に入ってこれからの事を考えていた。つーか、こんな田舎にも喫茶店があるとは思わなかった。

「春奈、大丈夫かな・・・」

さっきの様子から見て、春奈の扱いは決して良くはないのだろう。

虐待とか受けているのだろうか・・・、そうだったら警察や児童相談所に連絡しないと・・・

いや、まだ確たる証拠があるわけじゃないし、そうだとっても俺が来る前に親父達が既に連絡していただろう。

まだ連絡していないという事は証拠を掴めていないか、虐待ではない別の何か。

虐待以外のいじめってなんだろうな？

どちらにしても、最悪の事態が起ることだけはなんとしても避けなければならぬ。

とりあえず、もう一度様子を見てこよう。それで動きがなかったら一旦帰るとするか。

俺は頼んだ紅茶を飲み干すと、喫茶店を後にした。

.....。

そして次の日、そいつは突然現れた。

また俺は昨日と同じように、張り込み刑事並に家の様子を伺っていると黒塗りの車が家の前で止まった。

そしてその時、家の中から春奈が出てきた。

「春奈っ.....」

俺は大声で叫びそうになったが、なんとか堪える。

春奈は不安そうな顔で車の前に立っている。

すると、車の中からいかにもヤクザな風貌の中年男が出てきた。

「ほほーう。」

その男は春奈を舐め回すように上から下を見る。

「ガツハツハツハ！こりゃ今夜が楽しみじゃな！！！」

「ひっ！！？」

「っ！！！！」

その男はなんと春奈の尻を触って家の中に入っていった。

春奈は遠目から見ても恐怖でガタガタと震えている。

俺は春奈に声をかけようとしたが、その前に家の中に入っていつてしまった。

「あの野郎……」

あいつはいったい何が楽しみだというのか。決まっている。あいつは春奈をおもちゃにする気だ。

駄目だ……駄目だ……駄目だ！！

そんなの絶対許せねえ！！！！

俺は歯をギリギリと食い縛って殺してやりたい衝動をなんとか抑える。

「……！！！！」

俺は電信柱を殴りつけて気持ちを落ち着かせる。

落ち着け・・・落ち着け・・・とにかく今は赤ちゃん達の所へ帰ろう。

このままじゃ、春奈の心も体もボロボロになってしまう。

俺は急いで赤ちゃんちに帰っていった。

・・・。

「ばあちゃん!!」

「何だい、藪から棒に・・・」

急いで帰ってみると、呑気な事にはあちゃんと親父と母さんは茶を飲んでいた。

あー！何かイライラするなあ!!

「んな呑気にしてる場合じゃねえ！今春奈の家にヤクザの中年男が来て・・・」

「やっと来たね。」

セリフの途中では赤ちゃんはスッと立ち上がった。

「そいつは北里拓朗きたざとたくろう、春奈ちゃんの叔母、久代京子くしろきよこと同棲してるヤクザの男だよ。仕事でしばらく家を空けていたようだね。」  
「で、何でそいつを待ってたんだ？」

俺がそう聞くと、ばあちゃんはニヤリと笑う。

「あたしの情報によると、北里は薬をやってるみたいだね。で、京子の方も少なからずやってるみたいだ。」  
「……………」

俺は口を半開きにし、ポカンとした顔ではあちゃんを見た。

正に開いた口が塞がらない。信以上の情報収集能力である。

「つか、まさか信の師匠ってばあちゃんじゃないだろうな。」

「そういや、ばあちゃんが家に来たとき偶然居合わせた信と意気投合してたっけ。」

まあ、そんな話は置いていて。

「つまり後は警察にタレコミすれば万事解決って事？」  
「そづいづい。」

良かった……これで春奈も戻ってこれる。

だが、人生そんな都合よくはいかない。

「明日にはあたしの知り合いの刑事に動いてもらおうぞ。」

「っ!? 明日じゃ遅いんだ!! 今日やらないと!!!!」

俺はさっきの出来事をばあちゃん達に話した。

正直、そういう話は恥ずかしかったが、なりふり構ってられない。

「なるほどね。春奈の尻を触るなんて許せん。俺なんか触った事もないのになって思ったわけだ。」

「そうそう、なんて羨ましくて違うわー!!!!」

がー!!!!このクソババアは状況分かってやがるのか!!!?

俺が頭を抱えてのけぞっていると、急に真剣な顔ではあちゃんはビシッと俺を指差した。

「潤、今夜何とか春奈ちゃんを助けておやり。このまま普通の警察に任せると春奈ちゃんに危害が及ぶかもしれない。」

あたしの知り合いの刑事なら何とかなるんだが仕事で今日中には帰って来れないらしい。だから、あんたが春奈ちゃんを助けるんだ。」

「俺が、春奈を……分かった。」

一瞬、俺はもう一度、春奈を本当に救えるのかと思った。

一度目は孤独から、二度目は叔母と悪漢から。

でも、絶対に助けなきゃならないんだ。春奈に会いたがっているのは俺だけじゃない。

そう決意して俺は早速、春奈の家を目指し家を飛び出した。

潤が家を飛び出した後、雅人はほっと息をついた。

「良い目と覚悟だったな、我が息子。」

「そうだね、立派になったよね。」

雅人と沙耶はさっきの潤の姿を思い出し嬉しそうな顔をしている。

「さてと、あたしはあの刑事に電話でもしようかね。」

そう言って、幸は立ち上がって部屋を出ていく。

雅人は窓の外の景色を見て呟く。

「上手くやれよ、潤。」

……。

俺は再び、春奈の家の近くまで来ていた。

とりあえずまだ夜までには時間がある。さて、どうするか……

「でも、俺一人で本当に大丈夫なのか……」

急に不安になってくる、もし失敗したら春奈の心も体も壊れてしま  
うかもしれない。

いや、弱気になるな。後悔はしたくない。使える手は全て使う。

ふと、俺の脳裏に頼りりになる奴らの姿が浮かんだ。

「今の時間は……」

今出ればギリギリ間に合うってところか……

俺は携帯を取り出し、電話をかけ始めた。

.....。

「くそつ、まだか.....」

春奈の家の近くで張り込む事約数時間。

もう空も夕方とは呼べない時間帯になってきた。  
このまま、来なかったら俺が一人でやるしかない。

「春奈.....」

気の早い奴ならもう開始するかもしれない。

そう思っただらもういてもたってもいられなくなってきた。

「くつ、駄目だ、もう我慢出来ない！」

俺は春奈の家に飛込もうとした。

その時

「あなた、何一人で先走ろうとしてんのよ？」  
「っ!？」

その声のする方に振り向いてみると、そこには信、綾乃、美姫、雪華が立っていた。

「森神君、急にこんな遠くにまで呼び出すんだもん。大変だったんだよ。」

「でも、愛しの潤先輩の為ですから」

「ふっ、おかげで学園をサボタージュだ。」

「みんな・・・ありがとう・・・」

俺はみんなに心から感謝し、頭を下げた。

綾乃は苦笑しながら俺の背中をバシツと叩いた。

「詳しい事は後で聞くけど、今は春奈を助けるんでしょ。さっさと行くわよ。」

「待て、策は電車の中で話しただろう。」

「そうだった。」

綾乃は頭を掻いて春奈の家へ向いていた足を元に戻した。

俺にも電話で内容はちゃんと把握している。

「信、綾乃、美姫、雪華、来てくれて感謝してる。俺一人じゃ春奈を助け出せない。頼む、みんなの力を貸して欲しい。」

みんなに向き直って俺は改めて頼み込む。

みんなは笑いながら大きく頷く。

「当たり前よ、何のためにここまで来たと思ってるの？」

「そうだよ、春奈ちゃんは大切なお友達だもん。」

「春奈先輩がいないと、潤先輩争奪の時に張り合いがないですから。」

「ふっ、こんな面白いイベント、易々と逃す俺ではない！」

みんなの言葉が凄く心強い。こいつらが居てくれれば何でも出来そうなのがする。

俺はそれに答えるように大きく頷いた。

「よし！行くっ！！」

俺達は信の作戦通りに行動し始めた。

春奈・・・絶対助けてやるからな！！！！

## 第四話（前書き）

何かシリアス続くわ。

## 第四話

俺達は春奈奪還の為、信の作戦通りの配置に着いた。

信が考えた作戦はこうだ。

まず、俺と雪華が家の裏手に回り、中の様子を窺う。

春奈を発見出来ても出来なくても信に連絡をする。

連絡を受けた信はわざと相手をおびきだし、得意の口八丁で時間を稼ぐ。

恐らく出てくるのは京子の方だろう。信が稼げるのはせいぜい五分〜十分といったところか。

その間綾乃と美姫は信のサポート、雪華は拓朗を春奈から離れさせ俺が連れ出すという作戦だ。

ここで大事なポイントはいかに雪華が拓朗の気を反らさせ、いかに素早く俺が春奈を助け出せるかにかかっている。

俺と雪華が裏手に回ったところで信に連絡をした。

「信、裏に回ったぞ。家の中は・・・春奈も拓朗も見当たらない。」  
『そうか、ではこちらは出来る限り時間を稼ぐ。上手くやれ。』  
「了解。」

ピツと携帯の電源を切り、もう一度中を確認する。

電気はついているが人の姿はない。

「ところで雪華、お前どうやって拓朗を引き付けるんだ？」

「ふっふっふ、じゃん！」

雪華は懐から帽子とマスクとサングラスを取り出した。

そしてそれを身につける。

「名付けて、泥棒に変身してわざと見つかり追い掛けさせよう大作戦！！！」

雪華は俺に大袈裟にピースしながら言う。

随分長い作戦名だな、おい。

雪華の格好はどこからどう見ても怪しすぎる不審者だった。

「だが、追い掛けさせるなんて大丈夫なのか？もし、捕まったりしたら……」

「大丈夫です。足には自信があります。それにいざとなったらこれがあります。」

雪華はさらに懐から拳銃のような物と長方形の手のひらサイズの箱のような物を取り出した。

一つはエアガンという事は分かる。でも、もう一つは……

「こっちはエアガンで、こっちはスタンガンです。」

雪華はそう言ってスタンガンのスイッチを入れてバチバチと電気をほとばしらせる。

お、恐ろしい……。つーかどうやってスタンガンなんて手に入れたんだ？

そんな事を思っていた時、家の中からチャイムの音が聞こえてきた。

「始まりましたね。では私も行ってきます。先輩もヤクザさんが出てきたら春奈先輩を助けて下さい。」

「気をつけるよ。」

雪華は帽子を深く被り直し、中の様子を窺いながら家に入っていた。

雪華の携帯の通話が繋ぎっぱなしになっているので、家の中の声だけが聞こえてくる。

『ふんふん 何かめぼしい物はないですか』  
「こんな楽しい声だして物色する泥棒がいるかよ……」

緊張感がまるでない雪華の声に俺はため息をついて呆れた。

その時、電話から男の怒声が聞こえてきた。

『コラ、テメエ!!!そこで何しとんじゃあ!!!』  
『わー、見付かっちゃいましたー、につげろー』

流石に作戦通りといっても危険な事には変わらない。俺は心配して部屋の中をそっと覗き込む。

雪華が部屋の中から逃げてくると、その後を拓朗が追いかけて来た。

「待たんかい！ワレエ!!!」  
「ホホホホ、捕まえられるものなら捕まえて御覧なさい！」

雪華と拓朗はそのまま夜の闇の中へ消えていった。

雪華も中々に速い。あれならそう簡単に追いつかれることはないだろう。

「よしっ、出前迅速！待ってる、春奈！！」

俺は家の中に土足で踏み込んで春奈の姿を探した。

さっきの声を聞き付けて京子が戻って来るかもしれない。早く見付けなきゃ……

「くそっ！ここにゃいないのか！？」

俺はリビングを見回して春奈を探すがどこにも見当たらない。

くそー！！時間がねえというのに！！！！

俺は一階にはいないと判断して二階の一室に入った。

そこには一糸纏わぬ姿の春奈が　な事はなくちゃんと服を着た春奈がいたが、ベッドの上につつ伏せでぐったりしている。

「春奈！春奈！！おい、しっかりしろよ！！」

「……………」

春奈は目は開いているが、その瞳は虚ろで俺を映していない。

「春奈……まさかお前……くそっ！」

嘆いている暇はない。今は春奈を連れ出す事が先決だ。

ひとまず信達の所に戻らないと！

俺は全く動かない春奈を背負ってもと来た道から外に出ようとした。

だが……

「くそっ、逃げ足の速い奴やのう……」

「っ!？」

俺はとっさに近くの部屋に入る。

雪華の奴、速く走りすぎて追いかけるの諦めさせやがった！

「あんた、何があっただんだい？」

うわっ、さらに状況悪化。あれが多分京子だろう。悪女の雰囲気  
にじみ出てる。

信達もこれ以上は無理だったか……どうするかな……

「盗人が入りやがった。京子、何取られたか確認しとけ。」  
「あたしに命令しないでよ。」

拓朗はそう言って二階に上がって行ってしまった。

まずい・・・まずいぞ、二階に行かれたら春奈がない事がばれちまう。

そうしたら家中探しまわるだろうから、見つかったまう！

「逃げるなら今しかない・・・」

だが、この部屋には他に出口がない。今出ていけば確実に京子に見つかる。

くそっ、万事休すか・・・

諦めかけたその時、俺の頭の中で声が響いた。

『諦めないで。春ちゃんを助けてあげて、パパ。』

家の外で木々が風でざわめく音が聞こえた。

俺はその言葉に涙ぐみそうになるのを堪える。

「そうだよな・・・ありがとう・・・桜。」

そう呟くと、どこかで桜が笑ったような気がした。

俺は気を取り直して、ない知恵を搾る。

「考える・・・考える・・・今出来る最良の策を・・・」

よし、決めた。ビバ、特攻あるのみ！

何だか桜が今度は苦笑したような気がした。

「顔を見られちゃまずい、後ろを向いた時が勝負だ・・・」

そう呟いた時、京子が後ろを向いた。

今だ！！

「でりゃあ！！！！」

「ぎゃあ！！！！？」

俺はドアを開け放って京子のケツに蹴りを食らわせてやった。

一目散に外に向かって走り出した。

『京子お!!あの女がいねえぞお!!!!』

『うるさい!!今それどころじゃないんだよ!!!!』

よしっ、とりあえず成功!ケツ蹴ったのはどうかと思っが……。

俺は拓朗と京子の言い争う言葉を背に公園に向かって走り出した。

……。

「はあ、はあ、はあ……。」

春奈を背負ったまま、俺は走っている。

「はあ、はあ、うっ、ぐすっ、はあ……。」

春奈を助けた……助けたのに……

何で、こんなに悲しいんだ……

一歩、一歩、踏み出す度に悲しくなる。

いつの間にか俺は公園に着いていて近くのベンチに春奈を座らせる。

「春奈！春奈！！」

「……………」

肩を掴んで揺さぶっても、大声で呼び掛けても春奈は答えない。

「潤……………」

いつの間にか背後には綾乃達が立っていた。

「森神君……………」

「潤先輩……………」

美姫と雪華が心配そうに声を掛ける。

俺は気にせず再び春奈に話しかける。

「春奈、春奈、おい、しっかりしろよ、伝えたい事があるんだ。」

「……………」

春奈は答えないし、瞬きすらしない。

悲痛な声で呼び掛け続ける俺に信は言った。

「潤、久代は……久代の心は壊れている。」  
「っ……っ」

珍しく言いよどむ信は俺に現実を突きつけてくる。

分かっていた……分かっていたんだ……

こっちに来て春奈に会った時から分かっていた……

このままじゃ、春奈の心は壊れてしまうと……

俺は……俺達は、春奈を助けだした。だが、それは体だけ。春奈の心まで助けられなかった。

春奈の心は……もうとっくに……壊れていた……

「何だよ……何で俺は誰も助けられないんだ……」  
「潤……」

綾乃が心配そうな声を出す。俺はもう何も考えられなかった。

「美咲も！桜も！……春奈……さえも……」

今はもう人形のように身動き一つしない春奈を抱きしめる。

「結局俺は……誰も助けられないのかよ……!」

俺は春奈を抱きしめたまま地面に座り込む。

自分を責めても責めても怒りと悲しみは全く収まらない。

ごめん、美咲……俺、自分を許せそうにない……

「ちくしょおおおお……!」

夜の公園に俺の虚しい叫びが響き渡った。

## 第五話（前書き）

この話でシリアスしゅーりょー！…！ふはははは！次回からは甘  
甘&コメディで行きまっす！

## 第五話

白い壁、白いドア、白い天井。

ほぼ白一色で統一した病室のベッドで春奈は眠っていた。

俺はそんな春奈の隣でただ無気力に座っていた。

「春奈……」

もう何度その名を呼んだか俺自身全く覚えていない。

ばあちゃんの田舎には大きな病院はない為、俺達は戻ってきていた。

いつ戻ったのかも俺には全く分からないが。

時々、綾乃達が見舞いに来るのは覚えていた。

皆、口々に何か言っていた気がするがやっぱりあんまり覚えていない。

ああ、とかうん、とかしか言わなかった気がする。

俺が何も食べていない事を知っていたのか無理矢理何かを口に入れられた。

ああ……何だか眠たくなってきた。少しだけ眠ろう。

俺は春奈の手を握ったままベッドに伏せて眠りについた。

.....

その次の日の昼休み、綾乃達は教室で二つの空いた席を見ながら話をしていた。

「潤、今日も来ないわね・・・」

「仕方ないよ、森神君春奈ちゃんが心配なんだから。」

「でも、ふと気になったんですけど、潤先輩が塞ぎこんだのってあの公園からでしたよね。だったらどうして、助け出した時は大丈夫だったんでしょう?」

雪華が不思議そうに首を傾げるといつものようにどこからともなく信が現れた。

既にいつものことなのでもう誰も驚いたりしない。

「それは、実感してしまったのだろう。」

「実感って、何を?」

美姫が怪訝そうな顔をして信に聞くと厳しい表情のまま信は続ける。

「潤が久代を助けようとしていた時は助ける、という目的を常に念頭に置いていて久代の心が壊れてしまった事は考えないようにしていたのだろう。」

「でも、助け出した後、だんだんとその事を実感していつてしまった……」

「そついう事だ。」

綾乃がその話を聞いてそつ呟くと信は同意した。

そこから誰も話をしなくなり、重苦しい雰囲気だけが四人を支配する。

そんな中で美姫はゆっくりと口を開いた。

「……私達で何か出来ないのかな？」

「流石に現段階じゃ何も出来ないかな。」

悔しそつに歯を食い縛りながら美姫に答える綾乃。

美咲の時のように何も出来ないまま手遅れにはしたくない。あの時は何も出来なかった。

だから今度こそ何かしたいという思いが綾乃にはあったがするべき事が思いつかず歯がゆかった。

「今とはとにかく見守るしかないだろう。」  
「そうですね・・・」

信の言葉に雪華が同意したところで昼休みの終りのチャイムが鳴り響いた。

・・・。

今日もまた春奈は目を覚まさない。

肌の色も良いし、呼吸も正常で今にも起きてくれそうなのにあの時からずっと目を覚まさない。

そんな時、ガチャツと病室のドアが開いて誰かが入って来た。

「森神君、これ、お見舞い・・・」

どうやら美姫が見舞いの品を持ってきてくれたようだ。

だが、やはり俺は上の空で美姫の方を見向きもしない。

美姫はテーブルに梨やリンゴの入った袋を置いて心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。

「森神君、元気だして……って言っても無理だよ。でもちやんとご飯は食べなきゃ駄目だよ。」

「ああ……」

美姫はそれ以上は何も言わず、静かに病室を出ていった。

ごめんな、美姫……。心配してくれてありがとう、と言わなきゃならないと頭で理解していても体が動かない。

その後すぐに綾乃も来て、梨を剥いて無理矢理俺の口の中に入れてきた。

梨の味が全然分からず、春奈はこれすら食べられないと思うとまた少し涙が流れた。

それから少しして、ため息をついて綾乃も病室から出ていった。

悪い、綾乃。綾乃と美姫には今度何か奢るから。だから今は、春奈しか考えられない俺を許してくれ……

「春奈……早く起きてくれよ……」

俺は春奈の手を握り締めて目を閉じた。

俺が眠りについた頃、二つの人影が入って来たことに、この時はまだ気付きもしなかった。

.....

「ん.....」

いけね、いつの間にか眠ってたみたいだ。

目を擦りながらゆっくりと辺りを見回す。

「あれ、ここどこだ？」

病院の中だと思っていたら、どこかの公園らしき場所に俺は一人ポツンと突っ立っていた。

ここは.....そう、あの公園に似ている。春奈と初めて出会ったあの公園に。

「つーか、まんまあの公園じゃん!？」

公園の周りの景色は微妙に違うが間違いない。ばあちゃんの田舎にある公園だ。

「そうか、俺は今夢を見てんだ。うん、納得、納得。」

無理矢理夢と断定してさっさと起きる俺、とでも言うように目を閉じる。

だが、いくら待っても目が覚めるような気配はない。

「しゃーない、その辺ぶらぶら歩いてみるか。．．．ん？」

と、その時突然俺の目の前で何かが通り過ぎた。

俺は不思議に思い、それを目で追ってみるとどうやら小さな女の子のようだ。

その女の子はブランコに乗り、ただ空を見上げていた。

「んー？どっかで見たとあるような．．．」

俺はその女の子をよく見ようと不自然に見えないように近付いていた。

むう．．．まだよく分かん。仕方ない．．．

俺はもう少しだけ近付こうとしたその時、その女の子は空から俺へと視線を移した。

「っ!?!」  
「.....」

おいおい目、合ってるよ。何か、何か会話を.....

「え、えと、こ、こんにちは。」  
「.....」

ノーリアクション.....痛い、痛すぎる.....無垢な瞳が俺を傷つけるぜ。

あれ?この女の子、どっかで見たことあると思ったら春奈に似てる気がする。

俺は無言の女の子をまじまじと見つめてみる。

うん、間違いない、春奈だ。どことなく面影がある。

という事は、ここは春奈の夢の中?俺が見ているのは春奈の昔の記憶なのか?

春奈は未だにじーっと俺を見つめ続けている。

.....いや、違う。俺じゃなくて、後ろにいる親子連れを見てるんだ。春奈に俺は見えていないのか.....

(いいなあ……)

今は春奈の心の声か？頭に直接響いてくる感じだ。

春奈は切望の眼差しで向こうの親子連れを見ている。

右側に父親、左側に母親、真ん中には春奈と同年くらいの子  
が幸せそうに両親の手を握って笑っている。

(どうして……)

春奈の声が再び俺の頭の中に響いてくる。

(どうして私にはパパもママもないの……?)

春奈の悲しい気持も言葉と一緒に俺に流れ込んでくる。

(やだあ……一人はいやだよ……誰か……たすけて……)  
(

「春奈！」

堪えきれず、俺は春奈に手を伸ばす。

だが、その手は春奈の体をすり抜けるだけだった。

「春奈っ！うっ……」

突然、目の前が闇に覆われていき春奈も周りの景色も飲み込み、世界には俺一人になった。

少しして、周りの景色が徐々に現れ始める。

場所はまたもや公園。だが、さっきとは雰囲気の違い俺が知っている公園の姿に少しだけ近付いていた。

ブランコには中学生くらいだろうか、さっきより少しだけ成長した春奈がいる。

（私の、どこがいけないのかなぁ……私はただ、幸せになりたいだけなのに……）

「春奈……」

俺の頭の中に再び春奈の声が響いてくる。

（学校ではいじめられ、家でもいじめられ、いったい私の居場所はどこにあるんだろう……）

いじめ……春奈、いじめられてたのか？  
そんな事こっちの学園じゃ少しもなかったのに……

「……行かないや。」

（おばさんの所に帰りたくないなあ……でも、他に行く所もないし。）

春奈はブランコからピョンと飛び跳ねて、公園から出ていった。

俺はその姿をただ見守る事しか出来ない。

その時、また視界が闇に染まり再び公園の姿を映し出す。

既にその公園は俺が知っている公園と何一つ変わらなかった。

ただ、春奈は今度はブランコではなくベンチに座って空を見上げていた。

「白いワンピースに麦わら帽子……」

それは俺が初めて春奈を見たときの姿だった。

（今日もここに来ちゃった……何でだろう、ここに来ると凄く落

ち着く……)

空を見上げている時だけ、春奈の心が穏やかになっているのが俺にも分かる。

春奈にとってこの公園が唯一春奈が落ち着ける居場所だったのか・

・

「なんでかな……今日は何だか良いことがある気がする……」

今日は、そう、俺と春奈が初めて出会う日。

俺はこの日を鮮明に覚えている。

(あれ？誰だろ、見たことない男の子がいる……)

春奈の視線の先にはあの日の『俺』がいる。

『俺』はぼーっと春奈を見つめていて、春奈はだんだんと体が傾き地面に……って

「なに……!!?!?!?!」

あ、俺と『俺』がシンクロした。

つーかまた同じリアクションとっちまったよ。

『俺』は急いで春奈に駆け寄り、はあはあしながら背中に背負った。うーむ、他の人から見るとこの行動はどう見ても変態にしか見えん。ま、でも、ここから俺達は始まったんだよな。

春奈が公園を出ていった後、また俺の視界が闇に染まる。

俺が春奈で知らない事は俺がこの田舎を出ていった後の春奈だ。

俺が出ていった後、春奈はどうなっていたのかずっと気になっていた。

だんだんと闇が晴れていき、ブランコに座る春奈の姿がそこにはあった。

「潤君、元気かなあ……」

本当に嬉しそうな表情で春奈は呟く。

元気かなと言ったって事はあの時から一ヶ月くらい経ったってところか？

「……昨日帰ったばかりだけど。」

「うおいー!」

思わずつつこんでしまったが当然春奈は気付かない。

俺が帰ってもポンコツのままだな春奈は。

俺が苦笑していると、春奈の嬉しそうな顔に陰りが射した。

「大丈夫・・・きっと大丈夫だから・・・」

自分に言い聞かせるように同じ言葉を春奈は繰り返す。

何のことだ、と思う前に春奈の心の声が頭の中に響いてきた。

(おばさんだって、きっと分かってくれる。それに分かってくれなかったら家出しちゃえばいいんだし・・・)

俺には春奈の言っている意味が全く分からなかった。

なんだ・・・それ・・・?春奈、確か捨てられたって・・・

いや、ちよつと待て、俺。今までいいように使ってきたのにすんなり手放すか?

だったら警察に、と思ったが奴らは麻薬常習犯。どこから漏れるか

分からないのにそう簡単には頼れないだろう。

親父達はこの事を知っていたのだろうか。分からんな、ばあちゃん  
は知ってたかもしれないが。

再び視界が闇に覆われていき思わず目を瞑る。

次に目を開いて最初に入ってきたのが鮮やかな桜の木。

その桜の木の前に大きなカバンを持った春奈が佇んでいた。

「結局、許してもらえなかった。でも、私頑張ったよ。」

・・・ああ、分かっている。春奈はいつだって頑張っているよ。

春奈の言葉か、もしくは俺の言葉に返事をするかのように木々がざ  
わめく。

「それじゃ、多分明日になっちゃうけど、潤君に会いに行ってきたま  
す！」

大きなカバンを背負って春奈は歩き出した。

公園の外にはばあちゃんが待っている。

春奈が公園を出た瞬間、風景にヒビが入った。

周りの景色はまるで割れたガラスのように崩れ落ちて俺と桜の木だけを世界に残した。

いつからそこにいたのか、桜の木の根本に春奈が膝を抱えて座っていた。

「春奈……」

「潤君……」

久しぶりに春奈に呼ばれた俺の名前。

だが嬉しさよりもまず悲しさが先に来た。

73

「なあ春奈。どうして言ってくれなかった……」

「だってこれは、私の問題だから。誰にも迷惑はかけられないから。」

「そんな悲しい事言うなよ。だって俺は……」

「家族、だから？」

春奈は途中で俺の言葉を遮った。

春奈の声は今まで聞いたことのないような冷たい声だった。

「もう……いいよ、どうせ私は幸せにはなれないんだよ。もう私・」

「傷付きたくないよ……」  
「春奈……」

違う、そうじゃない、お前のおばさん達はもういないと言いたかった。だが、それを俺が言う権利はあるのだろうか。

こんなになるまで七ヶ月も春奈を放っておいたのは誰だ!?

家族家族と言いながらその悩みに気付けなかったのは誰だ!?

全部……全部俺じゃねえか……

でも……それでもこれだけは言いたい。

「春奈は幸せにはなれないって言ったよな。でもさ、俺達と過ごした一ヶ月幸せじゃなかったのか?」

「あ……」

絶望に染まりきっていた春奈の表情に変化が現れる。

「少なくとも春奈が来てから俺は幸せだった、楽しかった。春奈は違うのか?」

「あ……うあ……」

春奈の絶望に少しずつ亀裂が入っていく。

あと、もう一押し。春奈の絶望をぶち壊してやる。

「それにさ・・・春奈がいなくなつてから気付いたんだよな。隣に春奈がいないことが凄く寂しかった。春奈の笑顔が見たいって思つてた。

俺は春奈とずっと一緒にいたい。春奈、俺の隣にずっといてくれな  
いか？」

「・・・え？・・・それって・・・潤君が、私を好きって事・・・？」

頬を染めてポーツと俺を見つめてくる春奈。

照れるな、おい。

「みなまで言わすな。そういう事だ。」

「・・・潤君！」

バツといきなり春奈が抱きついてきて、押し倒された。

女に押し倒される男って・・・

「好き！私も潤君が大好き！！ずっと、ずっと一緒にいたいよ！！私・・・潤君と幸せになりたい！！！！！！」

「ああ、俺も春奈と幸せになりたい。これからはずっと一緒だ。」

俺と春奈は桜の花びらが舞い散るなかで見つめ合い、そっとキスをした。

すると、桜の木から光が溢れ闇を覆い尽していく。

ああ、夢が覚めるんだなあと感覚的に分かった。

.....

夢心地の中、誰かが俺の頭を撫でている。

ゆっくりと頭を起こすと穏やかに微笑む春奈と目が合う。

「おはよう、潤君。」

「ああ、おはよう春奈。・・・おかえり。」

「うん！ただいま！！」

俺は嬉しくて涙が自然に溢れてきた。

春奈も感極まって涙を流している。

しばらくふたりして嬉し泣きした後、春奈は顔を赤らめて上目使いで俺を見上げてきた。

「ね、ねえ、潤君……。夢じゃないよね？」  
「……………何が？」

本当は何の事だか分かっているが敢えて俺はすつとぼける。

急に春奈は不安そうな顔をして泣きそうになる。

「え……………あれって、単なる夢……………そんな……………」  
「あー、あー、嘘嘘、嘘だから。ちゃんと覚えてる。」  
「う……………ひつく……………ほんと……………？」

俺は安心させるように春奈に笑いかけて頭を撫でる。

「俺は、春奈が好きだ。ずっと一緒にいたい。」  
「……………うん……………うん……………私も、大好き……………」

俺は手を春奈の頭から頬に添え、ゆっくりと近づく。

春奈も俺の手に自分の手を重ねて目を閉じた。

「ん……………」

朝日が差し込む中、俺達は長く優しいキスをした。

## 第五話（後書き）

本当はこの話で終わらせて次の美姫ルートの『夏の日の姫』を書いてもいいのだけど、やっぱり流石に物足りない！後、十話くらいをアフターストーリーとして書いていきやす。

## 第六話（前書き）

作者の都合上、春奈ルートを早めに終わらせようと思います。遠からず美姫ルート『夏の日の姫』を投稿します。

## 第六話

春奈が目を覚ましたという吉報にまだ学園の時間だと言うのに綾乃達が駆け付けた。

「もうっ、心配かけて・・・ばか。」

「ふえっ、ぐすっ・・・よかつたよ〜春奈ちゃん・・・」

「よかつたですよ〜、春奈先輩〜。」

「ふっ。」

「うん、ごめんね、みんな。」

そういう春奈も久しぶりのこの状況に少し涙ぐんでいた。

俺もまた無事にこのメンバーで集まれた事に安堵していた。

「はいはい、感動の対面はそこまでにして検査があるから出ていってくれないかしら？」

春奈が目覚めたという事で婦長までもがやって来た。

「げっ、鬼婦長・・・」

「森神君も出ていかないとお尻にぶっとい注射器つつわよ。」

ひええ！お、恐ろしすぎる……

俺は思わずケツを押さえて後退る。

「ほら、潤。行くわよ。」

「あ、ああ、じゃ春奈。また後でな。」

「うん。」

俺達は春奈を残して一旦病室から出ていった。

……。

春奈の検査が終わるまで売店でも行こうかという話になった。

しかし、歩いている途中俺の体が一瞬ふらつとよろめいた。

「おろろ？」

「わわっ、森神君大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫、ちょっとふらつときただけ。」

心配してくれる美姫に苦笑で答えて頭を振る。

「あんた、寝てない、食べてない、品がないの三拍子揃ってるんだ

から少し休んで下さい。」

「おい、ちょっと待て。さりげなく品がないとか言っただろ今。」

「気のせい、気のせい。」

失礼にも程があるな、いや自分でも品があるとは思っちゃいねえが。

綾乃は売店の近くのベンチに俺を座らせて売店に入っていた。

「ふふふ、腕がなる。」

信が綾乃に続いて意気揚々と売店に入っていく。

・・・何が？

美姫と雪華も二人の後についていくかと思ったが俺を挟んでベンチに座る。

「どうした、二人とも。」

「うん、ちょっとね。」

「そうです、ちょっとです。」

なんとなく分かっていた。俺からもすぐに言おうと思っていたが、こんなに早く来るとは・・・

「ねえ、森神君……春奈ちゃんと、付き合う事に、したんだよね？」

「……………ああ。」

「やっぱりですか……………」

思った通り、この話題だった。

二人には悪いと思いつつも俺は春奈を選んだ。恨み言の一つもしようがないと思っていた。

「そっか……………お似合いだもんね。」

「そうですね……………」

「……………」

三人の間に気まずい雰囲気満ちる。

二人は俺を罵る事もなく、ただ憂いを帯びた顔をしていた。

「……………」

「ん？」

突然二人同時に立ち上がって振り返る。もうその表情に憂いはない。

「私はこれからも森神君を好きでいるから。」

「はい、私もです。隙あらば寝取ります。頑張りましょう、姫先輩

「！」  
「うん！」  
「……………」

遅しすぎる二人の言葉に絶句する俺。

でも、よかった。俺が一番恐れたのはこの関係が壊れることだったから。

本当によかった。二人の言葉がありがた過ぎて心にしみる。

「ああ。春奈にも宣戦布告してやれ。きっと喜ぶから。」  
「えー、何で喜ぶんですかー？」  
「あはっ、変だよな。」

美姫と雪華の目尻に涙が溜まっていくのが見える。

二人はそれを隠すように俺に背を向けた。

「……………じゃあ売店行ってみよ、雪華ちゃん。」  
「……………そうですね。潤先輩、また後で。」  
「ああ。」

美姫、雪華、本当にごめん。そして、ありがとう。

俺は売店の入口に入る二人に頭を下げた。

.....

それから少しして、売店から病室に帰って来ると春奈はベッドの中で眠っていた。

「ずっと眠りっぱなしだったもんね。体がまだ正常に戻ってないんでしょう。」

綾乃は冷凍庫に買ってきたアイスをしまい、春奈の顔を覗き込む。

「全く、幸せそうな顔しちゃって.....」

「綾乃？」

何だか綾乃が寂しそうな気がして俺は声をかけた。

だが、綾乃は答えない。しばらくそうして、やがて顔を上げた。

「さて、あたし達も帰りましょう。潤、あんたも今日は大人しく帰んなさいよ。」

「あ、ああ。」

綾乃はそれだけ言い残し、美姫達を引き連れて帰って行ってしまった。

俺は不思議に思いながらも今は眠っている春奈の頭を撫でる。すると、嬉しそうにふにやふにやした笑顔になった。

「どんな夢見てんだか。さて俺も帰るか。春奈、また明日来るからな。」

俺は荷物をまとめるのもそこそこに病室を出た。

.....

病室から出ていく潤を見ている人影が二人。

一人は潤と同じ年くらいの少年、もう一人は桜色の髪が美しい少女だった。

「いいんですか？森神さんに言わなくて」

「いいんだ。これは俺が勝手にやった事だから」

少年 牧野煉は自嘲気味に呟いた。その顔はやる事はやったと言  
うような顔だ。

「それに八重さんに頼まれてたからな。何かあったら潤を助けてくれって」

「そうですね」

少女　桜華が煉に同意した。

潤が体験したあの不思議な現象。あれは桜華が桜の使いの能力を使って潤の意識を春奈の中へ連れていったのだった。

もちろん、潤や春奈はそんな事は知らない。

ただこの能力は危険だった。もし、潤が春奈を連れてこれなければそのまま潤の意識は閉じ込められてしまっただろう。

だが、煉は潤なら出来ると思っていた。必ずやると信じていた。

潤の後ろ姿を見ながら煉は満足そうに頷いた。

「よし、帰るか」

「そうですね。頑張って私が晩御飯用意しちゃいます！」

「それはやめてくれ」

「あうう……」

そんなやりとりをしながら煉と桜華は病院を後にしたのだった。



## 第七話（前書き）

発表します！ 『夏に吹く春の風』 延期決定！ パチパチ、ドンドン、  
パフパフ！

それと同時に 『夏の日の姫』 も同時掲載！

この話から 『夏の日の姫』 を掲載します

皆さん、見てください。出来れば評価してください。ヨロシコ！

## 第七話

次の日、春奈に退院許可が下ろされた。

早速春奈の荷物をまとめ世話になった婦長に挨拶をする事にした。

「婦長さん。今までどうもありがとうございました。」

「ええ。無事に退院出来てよかったわね。」

俺は初めて鬼婦長の笑顔を見た。この血も涙もないような人でもこんな風に笑うのか……

そんな事を思った時、鬼婦長が今度は俺の方を向いた。しまった！バレたか！？

「森神君、ちよつとこつち来なさい」

「あ、あ、ああああ……」

「潤君、私ここで待ってるねー」

ああ、春奈。そんな事言わずに助けてくれ。今度は俺が入院してしまつ。

俺は婦長に首ねっこを捕まれて春奈からは見えない柱の陰に入った。

「ふふ婦長、おおお俺を、どどどどどじょうじょうののですか!」  
「めちやくちやどもってるわね。別に取って食おつとは考えてないわよ」

婦長は呆れながらそう言った。

だが、素直に頷けなかった。この婦長、人を油断させといて突然手は出るわ、足は出るわと看護師とは思えない程凶悪だ。

少々身構えながら婦長の一挙一動を注意深く見る。

「春奈ちゃんの事なんだけど・・・」  
「え?」

予想外のところからパンチが来た。

何だ?春奈がどうしたと言うのだ。

「あの子の事、ちゃんと大事にしてあげなさいよ」  
「はあ、まあそれはわかってますけど・・・」  
「うん、よろしい。ただそれだけ聞きたかったのよ」  
「いいんですか?婦長が人のプライベートな事に関わったりして」

俺がそう言つと、婦長は得意気な顔をして笑った。

最後だからか今日はよく笑うなこの人。

「いいのよ。ここの看護師ってそういう話好きだし、親しくなった患者にはよく聞いたりするから」

それに、と婦長は付け加えた。

「私の実家に春奈ちゃんと同じ年くらいの妹がいるのよ。だから何かと気にかけてちゃって」

「そうなんですか・・・」

「男だったら好きな女の子一人幸せにしてみてごらんなさい。男の義務よ」

婦長は俺の背中をバシッと叩いた。つーか素で痛い・・・。

だけど、まあ婦長の言う通りだ。俺は春奈を幸せにやらなくちゃならないんだ。

「絶対に、春奈を幸せにしてみせます」

「うん、いい返事。頑張れ、お幸せに」

婦長はそう言ってナースセンターの中へ戻って行ってしまった。

怖かったけど、いい人だったな。

俺はナースセンターに頭を下げて急いで春奈のところに戻った。

.....。

春奈と一緒に家に帰ると、誰もいなかった。

親父と母さんがいるかと思っていたがどこにもいない。代わりにテーブルの上に手紙が置いてあった。

『潤へ。僕と母さんはすぐに次の出張先に行く事にしました。春奈ちゃんのおばさんの件はちゃんと警察が片付けたから、春奈ちゃんはもう自由だ。』

それと、春奈ちゃんが回復したら僕達の所とおばあちゃんの所に連絡する事。もう春奈ちゃんは僕達の娘だからね、心配なんだ。じゃ、よろしく。父より』

「お父様.....」

春奈は感動した様子で親父が残した手紙をぎゅっと胸に抱く。

とりあえず仕方ねえから連絡してやる事にしよう。

俺は自分の携帯で親父の携帯に掛けた。

「そっいえばさ、春奈携帯持ってなかったよな」

「うん、そつだね」

今時の女子高生には珍しく春奈は携帯を持っていなかった。

何かと不便だろうから親父にでも相談してみるか。

「親父に相談してみるから、もしオツケーだったら午後にも買いに行こう」

「え、でもそんな悪い・・・」

『やあ、我が息子よ。春奈ちゃんは良くなったのかい？』

春奈が言い終わる前に親父が電話を取った。

相変わらず無駄にテンション高いのはどうにかしたい所だ。

「ああ、無事に退院して今家だ」

『そつか。うん、良かった良かった』

「あと、親父よ」

『ん、何だい？』

「今日にでも春奈に携帯買ってやるうと思っただがいいか？」

俺がそう言つと、何故か親父はより一層テンションが高くなった。

『いいね！携帯ー！じゃんじゃん買ってやりなさいー！そうしたら僕に

アドレスと番号教える事。いやー、娘とデコメとかするの夢だったんだよ！」

意外と知ってやがる、この親父。

春奈も隣で今の声が聞こえてきたのか苦笑いしている。

『ハツハツハ、やっぱり若い娘と話すのはいいからね！自分が若返った気分になる！特に春奈ちゃんだったら話してて癒される！あ、違う！違うんだ、母さん！決して母さんが若くないとか、癒されないとかそういうんじゃない！あ、あ、あああああ……』

プツツ、ツー、ツー、ツー

親父の奴、一人で勝手に盛り上がりすぎて母さんに禁句を言っちゃったな。意外と歳気にしてる感があるからな。

親父よ、安らかに眠りたまえ。なむなむ。

「でもいいの？携帯なんか買ってもらわなくても……」

俺が携帯に向けて合掌していると、春奈が申し訳なさそうに言った。

「何を言う。色々と便利だろうが。連絡も取りやすいし。」

「でも……」

「いいんだよ。俺がそうしたいんだし。彼女にプレゼントして何が悪い。」

そう言った途端春奈の顔がボンツと音がしそうなくらい赤くなった。

「彼女……彼女……えへへ」

春奈は俺が言った事を何回も繰り返し、しまいにやだらしい笑みを浮かべた。

こいつ、付き合う前は随分積極的だったのに、いざその立場になると急に初うぶになっとな。

「さて次はばあちゃんか」

俺はふふふと不気味なくらいに笑っている春奈をほっとしてはあちゃんに電話を掛けた。

「あ、ばあちゃん。嬉しい知らせが……」

『ああ、春奈ちゃんが目覚ました事かい？そりゃ嬉しいねえ』

「早っ！？何で知ってんだよ！っーか感動薄くねえ？」

『あたしの情報網を甘く見ちゃいけないよ。それと春奈ちゃんはち

ちゃんと目を覚ますってわかってたんだよ』

そうだった・・・このオババ、信の師匠だった・・・

しかしいくら情報網が凄くとも予言者じゃあるまいし春奈が目覚めます事はわからんだろう。

そつばあちゃんに言ってみると

『女の感かねえ』

らしい。

恐ろしいねえ、女の感。春奈がばあちゃんみたいになったら俺は泣くよ。毎晩枕を涙で濡らすよ。

チラリと未だに悶えている春奈を横目に見た。

まあ、こんななら大丈夫か。

『あ、ちよつと春奈ちゃんに代わりな』

「はいはい」

その尊大な態度と命令口調は止めてほしい。春奈がばあちゃんみたい  
いに 以下略

春奈に携帯を渡すと何だか嬉しそうに会話している。

その様子を見てみると突然春奈がまたボンツと音がするくらい顔を赤くして俺を睨みつけてきた。いったい何よ？

そして何故か胸を片手で押さえて俺から隠すようにした。

何なのよ、いったい。その豊満なヴァスト（情報によるとF）を俺が透視するとも思ってたのか？そんな能力あったらいいねえ。

「うう・・・潤君のえっち!!」

「はっ!？」

春奈は俺に携帯を投げつけて顎にクリティカルヒットさせた。

いてえ、まじいてえよ携帯。

春奈は逃げるように自分の部屋に戻って行ってしまった。

「あんたいったい春奈に何言った!!!」

俺は恐らく電話の向こうでほくそ笑んでいるばあちゃんに向かって叫ぶ。

案の定ばあちゃんは笑いを堪えながら言った。

『くっくっく、春奈ちゃんが寝てる間にあんたがいかかわしい事しまくったって言った』

「んなあつ!？」

酷い、酷すぎる!俺そんな事考える余裕全くなかったのに!

「あんた……最低だよおおおおお!!!」

俺は携帯の電源を切ってソファに叩きつけた。

はっ、そんな事してる場合じゃない!急いで春奈の誤解を解かなければ!

俺はマッハを超える勢いで春奈の部屋へ向かった。そして激しくドアをノックし自身の無実を訴える。

「春奈あ!誤解だ!誤解なんだ!俺はそんな事しちゃ……」

あまりに強く叩きすぎたのか勢いよく春奈の部屋のドアが開かれた。

そこには今まさに着替えようとしている春奈の下着姿が。

え?なに?なんで着替えてんの?それよりもピンクの下着、かなり

似合ってますヨ、春奈サン。

いかん、色々考えすぎて脳内がショートしてきた。春奈はポカんと俺を見ている。

本来ならさつさと謝って出ていくのだが、いかんせん体が動かん。

それよりもそんな春奈のあられもない姿を見て俺は無意識に言ってしまった。

「……………わんだふおお」

そんな事を言った瞬間色んな物が飛んできた。

ぬいぐるみ、教科書、目覚まし時計、etc。

いてえ！教科書の角がまた顎にクリティカルヒットした！

春奈は俺が部屋から吹っ飛ばされたのを確認するとドアを思い切り閉めた。

「やっぱりえつちじゃない！潤君の変態！スケベ！」

「誤解だ！激しく誤解なんだ！さっきのはあちゃんのいたずらで今のは故意じゃない！」

「……………さっきのはちゃんとわかってたよ。潤君がそんな事するはずないって、後から思った。でも今の見たら信じられなくなったよ！なに、ワンダフルって！」

しまった、あんな事口にするんじゃない。

「あれは無意識に言っちゃったんだって！俺はお前をやらしい目で見た事はない！」

「それって私には魅力がないって事！？」

「ああもう！どっちなんだお前は！！！」

それから延々と押し問答していて、終わったのはそれから一時間後の事だった。

女心は複雑だぜ。でも春奈のあの姿はばっちり心に刻み込んだ。ムフフフ。

## 第七話（後書き）

いやー、無事にダブルで更新できたわけですけども、ここでちょいと残念なお知らせ。

夏シリーズをダブルで更新するにあたって『ハピネスマジック』は一時更新ストップします。楽しみにしていた人は申し訳ないツス。

## 第八話（前書き）

超久々に更新。お待たせしやした。やっぱあんまり執筆できないね。つーかネタ切れ起こしそう。だからか、何だか下ネタが多い………

## 第八話

春奈が退院した日の午後。俺は春奈に携帯を買ってやるために商店街まで春奈と来ていた。

「さて、春奈。携帯と言っても色々あるぞ。どっこのがいい？」

携帯ショップに向かう途中、俺は参考に春奈の意見を聞いてみた。

「うーん、私そついうのってよくわからないからなあ。潤君にお任せするよ」

「お任せ、ねえ……。ま、見てから決めりゃいいか」

そうこうしている内に俺達は携帯ショップの前に着いた。

中に入ると店員のいらっしやいませという声に出迎えられた。

「わあ、たくさんあるんだあ」

春奈は店内にズラリと並ぶたくさんの携帯に目を輝かせる。

しばらく来ない内にまたずいぶん種類が増えたもんだな。

春奈は色々な形や色の携帯を次々と手に取り、しきりに、へえ、へえと感心していた。

「んじゃ俺も暇潰しに見てみようかね」

はしゃぐ春奈を置いて俺は他の携帯を見て回る事にした。

……………。

「ありがとうございました！」

店員の声に送られながら俺達は携帯ショップを後にした。

色々な情報に惑わされながら春奈は俺と同じ機種で白の携帯を買った。

「でもいいのか？もつと新しい携帯じゃなくて……………」

俺の機種は少し古い型だから本体だけならゼロ円だった。

異様にバカ高い携帯も困るが、タダというのもそれはそれで悪い気がしてくる。

「いいの。潤君とお揃いにしたかったんだもん」  
「っ……そ、そうか」

いかん、ちよつと照れた……………。

付き合い始めてから何だか妙に意識すると言うか、春奈ってよく見たらかなり可愛いじゃねえか、とか思うようになってしまった。

ふとした拍子にドキッとしてしまう。

「あれあれ？潤君、もしかして照れた？」

「……そんなわけあるか。さっさと帰るぞ」

春奈に凶星を言い当てられたので俺は拗ねたように速歩きで歩き出した。

背後からクスクスと嫌な笑い声が聞こえてくる。

くっ、なんか悔しいぞ……………。

「~~~~~」

なんか鼻歌歌ってるし。このままでは俺のプライドが許さん。今度は春奈を悶え苦しませてやる。

「あ、そうだ。潤君。今日の晩御飯何がいい？今日は機嫌がいいから何でもいいよ」

あ、今ピキーンときた。

ふっふっふ、名付けて春奈悶え苦しませ大作戦。そのまんまだが別に気にしない。

「んじゃあ、春奈で」

「……………え？」

ふっふっふ、固まっておる、固まっておる。

そこからあたふたして怒ればいい。そしたら余は満足じゃ。

「……………うん、わかった」

「……………は？」

いやちょっと待とうか。今うん、て言った？うん、と言っちゃいましたかあなた。

「あのう、春奈さん？そこは頷くとこじゃないんですけど……………」  
「……………私は、いつでも準備オツケー、だよ？」

これまで見た事もないような真っ赤な顔をし、熱っぽい視線で見上げてくる春奈。

まてまてまてまて！何このまっピンクな展開！？

いやね？俺だつて男だもん。春奈が来てから一週間くらいは一人部屋で悶々としてた時もあったよ？

いやもうなんか、そんな事思い始めたら自然と俺の視線は春奈の（信いわく、今もなお発展途上）胸に……………

うわあ！！！！俺もうケダモノー！！！！

「いや待て春奈！いつでも準備オツケーって、さっきと態度違くない？」

「それは、あの時はまだ心の準備が……………」

いつでも準備オツケーじゃねえじゃん！

だが、それでも春奈はお構いなしに体を俺にくっつけてくる。

「潤君……………」

いやまじ駄目だつて！そんな（信いわく、以下略）胸押し付けてきたら、俺……………俺……………



.....。

「はあっ、はあっ.....」

走りすぎてくたくたになりながら、俺は何とか家にたどり着いた。

春奈はちゃんと家にいるだろうか。まさかショックのあまり不良少女と化しているんじゃないだろうか。

だが、家の中に入ると俺の予想以上の事が起きていた。

「んっ.....はあ、ん.....」

え？何このなまめなしの声は。俺まさか帰っちゃいけない時に帰ってきた？

「んっ、はっ、だ、ダメだよお.....」

「ふっふっふ、良いではないか、良いではないか」

な、何！？春奈の他に男の音がする！

ま、まさかショックのあまり浮気！？い、いや春奈に限ってそんな事はねえはずだ。

春奈は俺にぞっこんラブンラブンなはずだ。そして俺も春奈にぞっこんラブンラブン。

じゃあいったいどういう事なんだ？

「そ〜よ〜、春奈。これくらいまだ序の口よ」

ぬおっ！？今度は女の声！？え、まさか、さん（ピー）！？この伏せ字あってないようなものだよな。

っーかちよつと待て。よくよく考えたら今のつて信と綾乃の声じゃねえか？あいつらいったい何やってんだ？

「あわわっ。そんなに春奈ちゃんいじめたら可哀想だよ」

「そんな事言つて〜。本当は姫先輩もいじめて欲しいんじゃないですか〜？」

「きゃっ！あ、ちよつと雪華ちゃん！そんなとこ、ダメえ……………」

美姫と雪華もいんのかよ！え、じゃあ、（「ピー」）！？くっそっ、羨まし、もとい、につっき信め。もう我慢ならん。

「おいこらお前等！人ん家で何やって……………る……………」

俺の時間が数秒止まってしまった。

そこには紛れもなく五人がいたのだが、俺が想像した卑猥な行為ではなく俺の対戦ゲームでただ遊んでいるだけだった。

「あ、潤君。おかえり〜」

「あ、ああ。ただいま……………」

俺が不思議そうな顔をしていると、春奈も不思議そうな顔をした。

「どうしたの？」

「いや、何でもないんだが……………どうしてこいつらがここにいる？」

俺はいまだにコントローラを手離していない四人を指差す。

「つか、こいつら人ん家でくつろぎ過ぎだろつよ。」

「えーい！ぶっ飛べー！」

「ふははは！甘いわ！」

綾乃と信が叫びながら見えない速度でボタンを連打している。

画面内では綾乃と信のキャラが飛んだり跳ねたり、何だか暑苦しい  
攻防を繰り返していた。

「えい！乱入です！」

「あたし達のバトルに割り込もうなんていい度胸ね、雪華」

「ふっ。二人まとめてかかってくるがよい」

信が不敵に笑う。つーかお前等、黙ってやれねえのか？

「取り敢えず、春奈」

「ん？なあに？」

「さっきは悪かった。急に逃げたりして」

俺は深々と頭を下げて春奈に謝罪する。

はあ、思い出したらまた憂鬱になってくる。女の子が勇気振り絞って言うてくれたのに、逃げるってねえだろうよ。

「ううん、もういいんだよ。私も焦ってたんだよ。早く不安を消してほしくて……ダメだよな、不安に思うのって潤君を信じてない証拠だもん。だから、これからもずっと潤君を信じるよ」

「春奈……」

そうか……春奈はずっと不安だったんだな。いつか俺が春奈から離れてしまっんじゃないかって。だから、俺との繋がりを求めたのか

……

俺は春奈の頭を抱えて、胸にそっと抱き寄せた。

「あ……………」

「大丈夫だ。俺はずっと春奈のそばにいる。何があってもな」  
「うん……………」

春奈も俺の背中に手を回してくる。

「えい」

「いやあ！？横から爆弾が飛んできた！」

「な、なんだと!?!」

「ああ……………飛ばされますう……………」

俺と春奈があまりい雰囲気醸し出していた横で、いまだにゲームをしている四人組の音が響く。

「つか雰囲気ぶち壊し。」

俺がちらりとそっちを見てみると、

画面内では美姫の使うキャラだけが生き残っていた。

「やった」

「じゃねえよ」

俺は春奈から離れてパコツ、と喜ぶ美姫の頭を軽く叩いた。

美姫は今気付いたと言わんばかりに目を開いて驚いていた。

「お前等いったい何してる？」

「あ、潤じゃん。お帰りー」

綾乃は俺の問いには答えずのんきにそう言ってきた。

遅せえよ！帰ってきたの五分前だから！

「だから、お前等いったい何してんだ！」

「何って言われても、ゲームですよ？」

ああ、はい、そうね。見りゃそれくらい分かるね。俺が言いたいの  
はそういう事じゃねえんだよ。

「何故ここにいる？」

「いや、今日商店街で買い物してたら、半泣きの春奈を見つけ  
ちゃってさ。何事かと思って話聞いたわけよ。で、多々あって今に至  
る」

「いや、話省きすぎお前」

綾乃が言うには、春奈の相談に乗ってくれたらしい。

だが、相談といっても綾乃はただ春奈の意見をばっはり切っただけだった。

そりゃあんだ、焦りすぎ、と。

春奈はその一言でさすがに急すぎた事に気付き、俺が決意するまで待つことにしたらしい。

簡単に解決してしまった後、落ち込んでいる時は騒ぐのが一番、という綾乃の持論でメンバー全員集めて俺ん家で遊ぶ事にしたというわけだった。

「わかった？」

「いや、わかったにゃわかつたけどよ……」

「まあまあ、潤先輩。細かい事は気にせず今日一日を楽しみましょうー」

俺が渋い顔をしていると、天真爛漫な笑顔で雪華がそう言ってきた。

「つか雪華よ。お前はいつも大雑把に物を考えすぎだろうが。少しは細かくなれよ。」

「……………ん？今日一日？」

「お前等、いつまで家にいる気だ？」

「あ、そうそう。今日みんなで泊まるからよろしく。ちなみに信君  
発案」

「ふっ」

急な展開に俺の脳内フリーズ。

よし、お前等。取り敢えず一言言わせる。

「勝手放題しすぎだおまえらあああああ……!……!」

俺の心からの絶叫が近所中に響き渡った。

## 第九話（前書き）

えー、まずは読者の皆様。すいませんっした！！！（土下座）  
我輩、受験勉強が忙しく、今も勉強の合間に書いてます。ですが！  
うまく行けば二月半からは復活出来そうなので、今まで読んでく  
ださった方。初めて読む方。はあ？誰こいつ。知らねえし。って方  
も、どうか生暖かい目で見守って下さい！

## 第九話

「潤ー、」飯ー」

「潤先輩、トイレどこですか？」

「森神君、テレビのリモコンどこー？」

……こいつら、人ん家で何をいけしゃあしゃあと。

「ええい！ お前ら！ 少しは遠慮しねえか！」

「「「ええー」「」」

俺がそう言うと、三人から不満そうな声が上がった。

どうしようもねえな、こいつら。彩乃と雪華はともかく、美姫まで……。

「まあまあ、潤君。賑やかなのはいい事だよ」

「しかしな、春奈。こういう奴らは甘やかしたらつげあがるんだぞ」

「ぶっ、心配せずとも、夜は何が聞こえても聞こえないフリをする。存分に夫婦の夜の営みに励むがよい」

「ぶっ！……！」

いつものすまし顔で信がそんな事を言ってきた。

この野郎。テメエがんな事言うから春奈が顔真つ赤で身悶えてんじやねえか。ようやくその話題から離れたのに。

「ふざけた事をぬかすな！ アホか貴様は！」

「何だったら、霧丘達も同時に相手をしてやればどうだ？」

信がそう言つと、春奈同様彩乃達までもがポツと頬を赤らめる。

お前らも真に受けんじやねえよ……。

「もう、いい加減にしてくれ……」

晩飯前に色々と一悶着が起こつたが、何とか無事に晩飯を済ます事が出来た。

そして、食後のまつたりした空気の中で全員特に何をするわけでもなくゴロゴロしていた。

「何か暇になつたな」

「そうねー」

俺の言葉に彩乃がソファーに寝そべりながら答えた。……行儀が悪

いな、おい。

「でも、もうゲームも飽きちゃいましたし……」

雪華も食後の茶をずずつとすすりながらテレビを眺めている。

「ふっふっふ、こんな事もあるつかと、これを用意してきた」

そんな時、信が不気味な笑みを浮かべながら六本の棒のような物を取り出した。

いったい何をしようというのか、こいつは。

「……何となく予想はつくけど、何よそれ？」

「ふっ、さすが霧丘。そう、これはパーティーでの王道。その名も王様ゲーム！」

またしょうもねえ物を、しかもわざわざ作ってきてるし。

俺ははあ、とため息をつくが、彩乃と雪華は意外とノリノリだ。何を企む、おのれら。

そんな中、春奈がキョトンとした顔で話しかけてきた。

「……ねえ潤君。王様ゲームって何？」

「何だ知らねえのか？ 王様ゲームってのは、今信が持つてる棒あるだろ？ それにそれぞれ番号が振ってあって、一本だけ王様って書いてあるのがあるんだ。」

で、それを引いた人が他の番号を引いた人に何か命令出来るんだ」「んー？」

俺の説明を聞いても春奈はよくわからないといった顔をした。

む、わかりづらかったか？ 仕方ない。

「信。春奈がルールわからないみたいだから、試しに一回春奈抜きでやろうぜ。春奈はちょっと見てな」

「うん、わかった」

「了解だ。では引け」

何故か彩乃と雪華は気合いを入れながら棒を抜き取る。美姫はそんな二人の後に苦笑しながら棒を引いた。

その次に俺が引いて周りに隠しながら書いてある文字を見る。

あ、ラッキー。俺が王様だ。

「あ、潤君が王様だー」

「何ですって!?!」

「最初は森神君かあ。変なのは来なさそうだね」

俺のを盗み見た春奈の言葉に彩乃が驚き、美姫が安心した表情を見せた。

まあ、最初だから軽めにするか。

「いいか春奈。王様を引いた人が命令するんだ。例えば、何番が何番に何をするとか、王様が何番に何をするとか命令するんだ。わかつたか？」

「うん、まあ、何となく……」

微妙にまだわかっていないようだったが、まあ見てりゃわかるか。

「んじゃあ、命令は……」

ゴクリ、とどこからか聞こえてきた。見ると彩乃と雪華がものすごい形相でこつちを見ている。

「つか、こええよお前ら……」。

「まあ最初だしな。そうだな……、王様が三番の頭を撫でるにしよう」

「三番……」

皆が一斉に自分の番号を見る。これが信だったら気持ち悪い絵になるな……。

だが

「わ、私だよ……。三番……」

おずおずと控えめに美姫が手を挙げた。うむ、信じゃないだけよし。

「いいなあ、姫先輩……。うらやましいです……」

雪華が羨望の眼差しで美姫を見ている。何だかねえ……。

美姫は顔を赤らめ、上目遣いで俺を見上げてきた。そんな美姫の頭をなでなでと撫でる。

撫でている間中美姫はうつとりとした表情で目を閉じていた。美姫にしっぽでもつけければブンブン振ってくれそうだな。

「と、まあこんなもんか。って、おい何だお前ら。何故に俺を睨みつける」

「別に何でもないわ。いいわ……。次こそは……」

「……先輩とキッス先輩とキッス先輩とキッス……」

「ふっ」

信はともかくとして、彩乃と雪華が何やら不気味に微笑んでいる。怖すぎるぜ、二人供……。

隣を見るとルールを完全に理解したのか、春奈がぶつぶつ言いながら何をさせるか考えているようだ。

眩きの中に俺の名前が出てきた事は言うまでもない。

はぁ……、どうやら今夜は長くなりそうだぜ……。

## 第十話（前書き）

えー、作者多忙のため、内容が少々薄っぺらいものになるのをお許しください。その分、更新の回転上げていきやす！

## 第十話

「王様来なさい王様来なさい王様来なさい」

「カモン王様、潤先輩にハグされたい」

「わ、私は森神君にそ、そそ、添い寝を……」

「え、えくと私は……」

目をキラキラさせてまるで餓えた獣のように王様を狙う三人に、春奈も負けじと色々考えている。

俺はもうなんて言うか祈るしかなかった。人間諦めが肝心なのよね。

「なあ、信」

「何だ？」

俺はゲームの棒をシャカシャカしている信に小声で尋ねる。

「あいつらに王様引かせない事って出来ねえかな？」

「出来るがやるつもりはない」

「何故だ!？」

俺が驚愕の眼差しで信を見ると、信はニヤリと口元をつり上げた。

「ふっ、俺が楽しめないからだ」

「お前ひでえ！」

くっ、こいつを頼った俺が間違いだった。

いやしかし、たとえ俺以外が王様になろうとも正確に俺をバツゲムには出来ないはず。

そう思っていたのに……。

「じゃあ二番が王様をハグしてくださいーい！」

見事王様を引いた雪華が声高らかに命令を下した。

そしてその二番とは……、

「……俺だ」

俺は渋々ながら手を挙げる。

つーか絶対バレてんだろこれ！

「むう……」

「うう……」

「いいなあ……」

「ふっ」

指をくわえそうな勢いで羨ましがる三人と不適に笑う一人。

そんな四人を尻目に、雪華は幸せいっぱいといった笑顔でトコトコと近寄ってきた。

「せんぱい、かむおくん」

雪華は両手を大きく広げた。さあ、ドント来いと言わんばかりだ。

……仕方がない、許せ春奈。

俺は右手で雪華の頭を抱き寄せ、左手を背中に回す。

「にゅふふふ　先輩の匂い、しあわせ」

雪華は俺の胸に顔を擦り付けてトロンとした笑顔を浮かべている。

う……可愛い……。春奈ほど胸はないが、歳相応に控えめなのが逆にいい……。

「潤君！　なにデレデレしてるの！」

「ひいっ！　す、すいません……」

鬼の角が生えてきそうなくらいおっかない顔をして怒る春奈。

俺は慌てて幸せ顔の雪華を引き離した。

「ああ！ まだ終わりって言ってません！」

「駄目よ！ もうアンタは終わり。……次こそは絶対……ブツブツ」

でかした彩乃！ 最後の呟きは少し気になるところだが……。

「さあ次だ。引け」

信がまた棒をシャカシャカさせて手を突き出す。

んじゃまあ、さっさと引きますかね。

「……いよっしー！」

念願叶ってようやく王様を引いたのか、彩乃が小さくガッツポーズした。

……すげえ嫌な予感がするんだが……。ちなみに俺は四番。

「ふっふっふっ……」

彩乃がいやらしい笑みを浮かべて俺を見てきた。

ヤバイ……なんかすげえヤバイ……。

「じゃあ四番が王様をお、お姫さま抱っこ……」

彩乃が頬を赤くしてモジモジしながら目線を落とす。

いや、恥ずかしいならそんな事言つなよ……。っーかやっぱバレてる……何故だ？

俺がそう思いながらも仕方なく手を挙げると……

「……キッ！」

「っ!？」

ほら春奈が恐ろしい視線投げ掛けてきてるよ。後々酷い目見んのは俺なんだぞ……。

「ほ、ほら……は、早くしなさいよ……」

春奈の鬼眼（鬼のような目）に睨まれながら俺は彩乃の首と膝の裏に手を入れて一気に持ち上げた。

「わわわっ」

彩乃は焦って俺の首に手を回してきた。その際顔と顔が急接近。

彩乃の長いまつ毛とか、柔そうな唇とか、フワリとしたい匂いとかでなんかもう……。

「いや、んな事考えてる場合じゃねえし！　近い、近いぞ彩乃！」  
「潤……」

彩乃はぼーっとした表情を浮かべながらだんだんと顔を近づけてきた。

まずい！　このままでは非常にまずいぞお！

「お、おい彩乃……」

俺は慌てて顔を引き離そうとするも、手でガッチリホールドされていて離せない。

そんな事している間に彩乃の顔が、どアップからどどアップくらい

までになっていた。

どうなる？ どうなっちゃこの俺？

あ、あ、あぁー……。。

## 第十一話（前書き）

なんかもうどんな終わらせ方をしたらいいかわかりません……。そろそろ美姫ルートを進めなければならぬのに……。

## 第十一話

だんだんと近づいてくる彩乃の顔。既に彩乃は目を瞑っちゃったりなんかしちゃっている。

俺の目が自動的に彩乃の唇をロックオン。

俺は吸い込まれるように彩乃の唇に

ガシイッ！！！！

と、いきなり俺と彩乃の顔と顔の間に誰かの手が割り込んだ。

「あ、綾ちゃん？ さ、さすがにそれは命令の範疇を越えちゃってるかな、なんて……」

その言葉に彩乃はハツとして顔を離れた。

俺はギギギ、と油の切れたロボットのような動作で右を見る。

そこにはこめかみをヒクヒクさせ、仁王立ちしている春奈の姿。

「……ドツタノカナ？ ハルナサン」

「潤君……。私という者がありながら……。これは後でお仕置きだね」

ヒイイイイ!!! 怖い、怖いよ春奈! 最後の なんか怖いよ!

彩乃を抱えたまま怯える俺を置いて、無情にもゲームは進行していった……。

「さて、もういい時間だから次で最後にしましょ」

彩乃が時計を見ながらそう言った。

俺は魂が抜けたように、

「ソデスネ……」

「どうしたんですか先輩。そんなロボットみたいに」

「森神君、大丈夫? 体調でも悪いの?」

「……どの口がそんなこと言いますか」

「「えへ」」

雪華と美姫が可愛らしく舌を出す。可愛いから許してやるっと思

うのは悲しい男の性か。

潤と彩乃のキス未遂事件（春奈命名）の後、何故か罰ゲームの集中砲火は全て俺が被った。

専ら王様になるのは彩乃と美姫と雪華の三人で、信は被害なし、春奈は王様にも罰ゲームにもならなかった。

確実に信が裏で糸を引いているとしか思えないのだが、目を凝らして見ても証拠が全く掴めない。

彩乃達が俺とくんずほぐれつする度に春奈のヤキモチゲージが増え  
ていき、俺の体は最早限界。もう立っていられましえん……。

「さあ引け」

俺にとってその言葉は最早死刑宣告にも等しい。

彩乃達三人はホクホク顔なのに対し、春奈はぶうたれている。後が  
恐ろしいな、おい。

「あ、信君」

彩乃が棒をシャカシャカしている信に近づき、何かを話している。

……もしやあれか？

また俺を貶めようとか考えてんのか？

「……ふむ。了解した」

「んじゃ、よろしく」

彩乃はそう言って俺を見た。そして口元がニヤリと不気味につり上がる。

……あいつ、やっぱり何か企んでやる。

彩乃、美姫、雪華、春奈の順番で引いて残りは二本。

選んでも無駄か。もうどうにでもしてくれ……。

俺は半ば諦めて右の棒を引き抜くと、そこには三番という文字が。

「あ、あれ？ 私、王様だ……」

「なぬ!？」

最後の最後に春奈だとっ!？ あいつら何を企んでやる……。

「ほら春奈。潤に命令しちやいなさい」

「でも潤君の番号が……」

「森神君の番号は三番だよ」

ぬがっ!？ だから何でわかるんだよ!

と、思っている間にも春奈はどうしようかなー、どうしようかなーと考えている。

「……………うん、決まった。じゃあ、三番は」

い、いったい何が来るのか？ ここまでに春奈のヤキモチゲージは限界突破しているから無理難題でも来るといつのか？

「 王様と明日の朝まで一緒に寝ること」

え？

「ち、ちょっとちょっと春奈! かわいそうだから最後は春奈に花を持たせようと思ったけどそれはさすがに……。それにさっきはまだいいって……………」

「? 一緒に寝ることがそんなにいけないの?」

どうやら春奈的ニユアンスとしてはただ一緒に寝るといふことらしく、いやらしい意味はないようだ。

それに気づいた彩乃は慌てて訂正した。

「い、いや、別に一緒に寝るだけなら何も問題は……いやむっちゃあるじゃない！ そんなのうやらまし……もとい、危ないじゃない！ 潤だつて男よ！ 襲われるわよ！」

なんだか焦りすぎて何を言ってるのかよくわからんが、最後の方は聞き捨てならんな。

こちらら理性は人一倍強いぜ。伊達に春奈がここに来てからの一週間悶々としていたわけじゃない。

「大丈夫だよ。潤君はそんなことしないよ。それに襲われるならとつくに襲われてるし」

「た、確かに正論ですね……」

と、雪華が多少驚いたように相槌を打つ。

俺もちょっと驚いた。あの天然入った春奈がまともなことを言うとは……。

「ま、まあそれはそうかもしれないけど……」

「だ、大丈夫だよな？ 森神君」

「あー、うん、まあ大丈夫だろ」

「ふっ、そこで肯定するのも男としてどうかと思うがな」

そこ、うるさいぞ。

「ちょーっらやましいです！ 私もそういつ命令すればよかったです！」

「お前な……」

雪華よ……、そんなことしたら俺が春奈に殺されるではないか。

「少し納得いかないけど、そろそろ寝るわよ。潤、あたし達はどこで寝ればいい？」

「いや何か普通に話進んでるがいいのか！？ ホントに俺と春奈が一緒に寝るのか！？」

「諦めなさい。王様の命令は絶対よ」

いやしかしな……。

俺が渋っていると、信がポンと俺の肩に手を置いた。

「気にすることはない。何が起ころうとも俺達は見ざる言わざる聞かざるを貫いてやる」

「いや止めるよ！ 逆にやだよ！」

「はいはい！ そうやってるといつまでも寝れないから。姫ちゃん、雪華。あたし達は春奈の部屋で寝るわよ」

「うん、わかった」

「りょーかいです」

彩乃はさっさと話を切り上げると美姫と雪華を連れて二階に上がって行ってしまった。

「で、いったい信はどこで……って、いねえ！」

いつの間にか隣にいた信が消えている。相も変わらず神出鬼没だ。

リビングにポツンと残された俺と春奈。

「……寝るか」

「……うん」

なんだか気恥ずかしくてまともに春奈の顔が見れん。言い出した春奈も今さら照れてるっばいし。

「……でも、ま、いい機会か」

「え？ 何か言った？」

「いや、何でもない」

春奈もあのことを尋ねてこないところを見ると、あらかた気づいているのかもしれない。

俺はある決意と共に春奈を連れて二階に向かった。

春奈に全てを話そう。

美咲と桜の思いを。

## 第十一話（後書き）

ここでぶつちやけ話を一つ。春奈に桜のことを話すの忘れていて今回のラストに無理矢理絡ませました。もう今回みたいなことはなくさないと……。

## 第十二話（前書き）

いやー、すいませんでした！！！！ いやホント。なかなか執筆出来ず、ネタも思い浮かばず、途中で諦めかけちゃったりもしてしまいました。だが、しかし！ 書き上げました！ 最期まで！ これでこの物語は一応の完結を迎えます。楽しんでいただければ幸いですねえ。

## 第十二話

そんなこんなで春奈と一緒にベッドインしてみたわけだが……。

「な、なんだかドキドキして眠れないね」

「ま、まあ確かに……」

暗闇の中でわかりづらいが俺も春奈もきつと顔は真っ赤になってるだろう。

何せまだ付き合い始めたばかりで、こんなラブラブシチュエーションの耐性がついていない。

「ねえ……潤君……」

「ん？ 何だ？」

「手……繋いでもいい？」

さっきの王様ゲームもそういう命令なら喜んでするんだがな。

俺は苦笑しながら黙って春奈の手を握った。

「潤君の手……あつたかい……」

春奈は両手で俺の手を握りしめてそのまま胸元へ持っていく。

いつもなら焦る場面だが、今は不思議と安心していた。

ああ、好きな人と手を繋ぐだけでこんなにも安心出来るもんなんだなあ……。

「……なあ、春奈」

「……んー？」

なんだかもう春奈は寝そうになっているが、構わず俺は切り出した。

「桜のこと……なんだがな」

「……」

春奈は答えない。

「あいつ……どっか遠い所に……行っちゃったんだ」

俺は敢えて桜が消えたとは言わなかった。

それは春奈を悲しませたくなかっただけじゃなくて、俺自身もう桜が帰ってこないと認めたくなかっただけかもしれない。

そして、春奈から返ってきた言葉は

うん、知ってるよ

「……………」

やはり春奈は気づいていたのか……。だが、どうやって……？

そう俺が聞く前に春奈は理由を話し始めた。

「潤君……。前に私の夢の中に来た時、大きな桜の木があったの覚えてる？」

「ああ、あのでっかい木な」

あの時、春奈はその桜の木の下にいたんだ。

「あの桜の木から桜ちゃんの声が聞こえてたんだ」

「……………え？」

「どういう原理かはわからないけど、桜ちゃんはその時全部話してくれたんだ」

春奈いわく、桜は俺の時と同じように話したらしい。

この町の言い伝えのこと。桜の使いのこと。美咲のこと。

「……………なんだよ。……………もっと話をしたかったのに……………」

なんだか俺は悲しくて、悔しくて、気がついたら涙が流れていた。

「あゝあ。桜ちゃんが言った通りになっちゃった」

春奈は苦笑しながらパジャマの袖で俺の目を拭う。

「桜ちゃんね、『ボクの話をしたらきつとパパ泣いちゃうから、パパから聞かれるまでは黙っててね』って。結局泣かれちゃったけどね」

「……………そ……………か……………」

俺って情けねえ。いつの間にか涙もろくなっちゃった。

「あのね、潤君。明日お花見に行かない？ 二人きりで」

俺は目をゴシゴシと拭い、仰向けになった。

花見か……。ならあの桜の所だな。

「ああ、そうだな。桜の前でちゃんと言おう」

春奈は満面の笑みで頷くと、俺の手を握ったまま眠りについた。

俺も泣き疲れたのかだんだんとまぶたが重くなっていき、意識は闇に沈んでいった。

## 第十三話

キイイ、バタン。

「「「……おはようございます……」「」」  
「ふっ」

小鳥がさえずり始める明朝5時。

綾乃、美姫、雪華、信の4人が抜き足差し足忍び足で潤の部屋に入ってきた。

ベッドの上には眠り続ける潤と春奈の姿。

潤は左手を春奈の腰に添えて、春奈は潤の右腕を枕にしている。

「くうう、春奈先輩うらやましいですう……」

悔しげに雪華が指をくわえて眺めている。今にも潤に向かってダイブしようとしている。

「待ちなさい」

すかさず綾乃が雪華を羽交い締めにしてこれを阻止。

「は、離してください！ 後生ですか むぐぐ」  
「おバカ！ でっかい声でしたら起きちゃうでしょーが！」  
「あ、綾ちゃんもけっこう声おつきいよ？」

さりげにヒートアップしていた綾乃に美姫がつっこんだ。

「ん……んん……」  
「あん……」  
「「「っ！？」」「」  
「ふっ」

潤が身じろぎして春奈を抱き寄せ、さらにその豊満な胸に顔を埋めた。

無意識とはいえ、そんな朝からエロチックな潤の行動に3人は眼を見開き、1人は鼻で笑った。

「っ！？」（このエロエロ大魔王！！ なにあたしらの前で堂々と胸に顔埋めてんのよ！！）」  
「……」（森神君、そんなにおっぱい好きなんだあ……。言ってくれたらちよっとくらい……）」  
「っっ！！（そうですか！ 胸ですか！ 男の人はやっぱり大きい方がいいんですか！！ いいじゃないですかちっちゃんくたって！先輩もちっちゃんの好きになりましょーよ！）」

各々声に出そうなのを我慢して心の中で絶叫する。美姫に至っては  
なんだか方向がずれている。

その中で信は

「……（ふむ、やはりウォッシュレットはいいな）」

全く関係ないことを考えていた。

「と、とにかく当初の目的を達成させましょう」

「ほ、ホントにやるの？」

自分と春奈の胸を比べて若干へこんだ雪華だったが本来の目的を思  
い出してグッと手を握る。

それを不安げに見ている美姫。

「いいのいいの。こういうのは隙を見せた方が負けなのよ」

「ふっ、下心丸見えだな」

信は誰にも聞かれないようにボソッと呟いた。

最初はただ単なる悪ふざけのつもりだった。

綾乃、美姫、雪華が寝る前の雑談をしている時、綾乃が放った

「寝起きどつきりとかしてみたいわねー」という言葉に、ノリのいい雪華が

「だったら潤先輩の寝顔見たいです！」と鼻息荒く訴え、美姫は

「や、やめようよー」と説得を試みたがどこからともなく現れた信の

「潤のあどけない寝顔……」と耳元でボソツと囁き、ちよつとくらいいいかなと結局美姫ものせられてしまった。

「おーっと、ここで先輩が飲み残したのか深夜の紅茶（500ミリボトル）が置いてあります」

と、雪華はベッドの横にある机の上に紅茶のペットボトルを見つけた。

半分ほど残っているところも寝顔どつきりのいかにもなシチュエーションである。

雪華はガシッと勢いよくそのボトルをつかむと、うつとりした顔でキャップを開けた。

「ふふふ、先輩との間接キッス、いただきます」

「「待て（待って）」」

綾乃と美姫がボトルに今にもしゃぶりつきそうな雪華の顔をつかむ。綾乃は眼を細めてあんなにやってんのよ、という視線を向け、美姫は頬をひきつらせている。

「なんですかー、最初に見つけたのは私ですよー」  
「そんなもん関係ないわよ！ なに1人で突っ走ってんのよ！」  
「そうだよ！ 抜け駆けはよくないよ！ わ、私だって森神君とか、かかかか間すっ！！？」

美姫、照れすぎて嘸む。

「いーじゃないですかー！ お二人とも私の後にすればー！」  
「ダメよ！ それだけは絶対ダメ！！！」  
「雪華ちゃんの後じゃ意味ないんだよ！」  
「……お前らいったい人の部屋でなにやってやがる」

その言葉で3人の時間が止まった。

3人がギギギツとその声の方を振り向くと、目をパツチリ開けた潤がいた。春奈はまだ眠そうに目をこすっている。

雪華は手に持っているペットボトルをそーっと自分の背に隠した。



## 第十四話

「まったく、あいつら……」

「まあまあ、別に何かされたわけじゃないんだし、許してあげようよ」

時刻は午前7時。まだ起きるには少し早い時間だ。

まあそれはあの愚か者どものせいなのだが……。

朝の寝起きどつきりを敢行したあの4人は俺が起きるや否や、あーそろそろ帰らなきゃー、とか今取って付けたような理由でそそくさと帰っていった。

「むう、春奈はあいつらに甘すぎるぞ」

「あはは、友達は大切にしなきゃだめだよお。……1人占めはよくないもんね……」

「んあ？　なんか言ったか？」

「んーん。なんでもない」

一瞬春奈は憂いを帯びた顔をしたが、次の瞬間には普段のふにやつとした笑顔に戻っていた。

だがあのまま寝てたら俺襲われてたぞ。

つーか去り際に雪華が、

「大きいのがいいんですか？」とか聞いてきたが、俺はよくわからんまま、

「まあ大は小をかねるとか言うしな」とか言ったら、

「先輩のばかぁー！」と叫びながら帰っていった。

いったいなんの事だったのか？

さて、出かける準備でもするかな。今日は日曜だし明日からまた学校とかで多忙の日々が始まると思つと憂鬱だが。

「じゃあ俺着替えてくるから、春奈も花見の準備しとけよ」

「うん、わかった」

潤君が着替えに部屋へ戻った後、私はさつき作り終えたお弁当を鞆に詰めた。

今日の献立は潤君の好きなものばかり。その中には潤君が私に初めて作ってくれたエビフライも入っている。

あれ以来、潤君は全くお料理してくれない。まあ私が率先してやってるからそんな隙がないからだと思っけど。

「よし、終わり」

後は私も着替えるだけ。最近はご無沙汰だったけど久しぶりの二人きり。

昨日みたいな賑やかなのも好きだけど、たまには潤君と二人きりで過ごしたい。

「……えへへ」

はっ、いけないいけない。油断したらすぐにやめちゃう。

今日は桜ちゃん自身とも言える、あの桜の木に潤君と恋人同士になった事を伝える。それも一つの目的。

だから忘れないようにしなきゃ。

でも

「……えへへへへへ」

やっぱりすごく嬉しい。

その後部屋に戻って着替えるまで私はニヤニヤが止まらなかった。

着替え終わって俺と春奈は弁当を持って、桜が消えたあの公園に向かった。

初めはどうでもいい会話をしていた俺達だったが、その公園が近づくにつれてだんだんと口数が減っていった。

やがて、そこにたどり着いた。

「どこ？　桜ちゃんと最後に会った場所って」

「いや、もうちょい先にでっかい木があるんだ」

公園の木々はもう花は咲かせておらず、見える木全ては既に葉桜になっていた。

「やっぱり花なんてもう咲いてないよな、さすがに」

もう5月も半ばで初夏と言えなくもない気候だから仕方ないと言えは仕方ないが、やはり寂しい。

そこから少し行った場所に一際大きな木があった。

そこは桜が最後の最後に自分の気持ちを素直に話し、涙とともに消えていった場所。

俺はもう葉しかない桜の木を見上げた。

「桜。お前がいなくなってしばらく経つけど、まだ全然慣れない。だけでも俺は振り向かないから」

「潤君……」

俺は木の幹に手を置いて、しばらく何も考えずそうしていた。

「さて、じゃあ飯でも食うか！」

「……うん！ そうだね！」

俺がおもむろに立ち上がって振り向きながらそう言った。

と、次の瞬間突然目の前が真っ白になった。

## 最終話

目の前が真っ白になった、と思ったらどうやらそれは花びらが周り一杯に舞っているからだと気づいた。

春奈もこの幻想的な現象に目を輝かせている。

でもこの花びらは

「桜？」

試しに手を伸ばして花びらを取ってみると桜の花びらだった。

これは、あの時と同じ……。なら、まさか……。

桜の花びらの舞がだんだんと収まっていく。

すると、目の前に誰かが立っている。

ふさふさの犬耳に、同じような尻尾。その姿は俺の好きだった人と瓜二つだが中身はまるで違う。

「……………桜……………」

「えへへ、ちょっとだけ久しぶり。パパ」

俺は目の前で起きていることがまだ信じられなくて思わず犬耳を触ってしまった。

「ん……くすぐりたいよ」

「お前、ホントに桜か？ 夢とかじゃないよな」

俺は犬耳だけじゃ納得できなくて、次は尻尾を触り始めた。

「んん……パパ、そこはちょっと……」

「ちよっと潤君！ なにしてるのー！！」

俺が桜の尻尾を触っていると、後ろからスパーン！ と張り手が落とされた。

「ぐほっ！？」

あ、すっかり春奈がいる事忘れてた。

「は、春奈……。最近なんだか綾乃に似てきてないか？」  
「むー、綾ちゃんから潤君をしつける為に張り手の極意を教えてもらってるもん！」

綾乃のやつ、なんて恐ろしい事を……。春奈がドSになったらどうしてくれるんだ。

「でも、どうして桜ちゃんが？ また一緒にいられるようになったの!?!」

春奈がもしかして、と期待したような視線を投げ掛ける。

だが、桜は少し困ったように首を振るだけだった。

「役目を終えた桜の使いは本体である桜の木と一つになる定め。今のボクは残りカスみたいなものだよ。木と同化するまであんまり時間もないんだ」

「そう……。なのか……」

だが、あの時の言葉がまだ頭の中から離れない。

離れたく……。ないよお……。!!

俺は、諦めたくない。

「桜。お前まだ俺達と一緒にいたいって思ってるんだよな？ だったら」

「ごめんね、パパ」

俺の言葉は途中で桜の謝罪で遮られた。その言葉は諦めと断定の色に染まっていた。

「これはね、避けられない事なの。ボク、さっきまで木と同化する一歩手前だったの。でもパパの声が聞こえて、ちよっと頑張っ外に出てみたんだ」

「桜ちゃん……」

桜は涙ぐむ春奈にニコリと笑いかけた。

桜の言葉で、ああもう本当に無理だという事を悟ってしまった。だが、それを認めたくない。だったら俺に何が出来るのか？

それとも、俺はもう桜に何かしてあげられる事は出来ないのか……？

「そんなことないよ。パパと春ちゃんにしか出来ないことがあるよ」

顔にでも出てたのか、桜は俺の心を読んだかのようにそう言った。

そして、俺達にしか出来ない事とは

「な、なんだか緊張するね……」

「あ、ああ……」

俺と春奈は桜の花びらが舞い散る中、手を取り合って佇んでいた。

目の前にはニコニコ笑顔の桜。桜自身とも言える桜の木を背にして。

「では、これよりパパと春ちゃん……じゃなかった。新郎森神潤と新婦久代春奈の結婚式を執り行います」

桜の最後の願い。それは俺と春奈の結婚式を見ることだった。

当選何も用意しているわけがなく、結局神父役を桜にして、観客も教会もない結婚式をすることになった。

「あ、聖書も何もないから最後だけ残して全部すっ飛ばすからね。ボクはボクなりに知ってることでやっていくから」

「あーわかったから、早くしてくれ」

「……恥ずかしい……でもちよつと嬉しい……」

春奈のやつ、本音が出やがった！ いや俺も嬉しくないわけじゃないが。

そうしている間に、桜の準備（と言ってもセリフ考えてただけだろうが）が終わったようだ。

「新郎、潤は病めるときも、死す時も、妻と共に歩き、共に愛し合う事を誓いますか？」

おお、けっこう本格的なんだな……。

「ん……はい。誓います」

やっぱりむちゃくちゃ照れる……。横で春奈も顔赤くしてるし。

「新婦、春奈は夫を支え、家庭を守り、永久とわに愛す事を誓いますか？」

「……はい。誓います」

春奈がそう答えると、桜は満足そうに頷いた。

「では、誓いのキスを」

おい。なんで語尾に　が付くんだ。ふざけすぎたろが。

しかし、キスカ……。いや、そう来るだろうと思ってはいたが。

春奈はさっきまでの羞恥はどこへやら。既に俺を見上げて頬を赤らめスタンバっている。

「はぁ、仕方ない」

俺はため息を一つして意を決し、春奈の顎に指を添えてゆっくりと顔を近づける。

やがて、唇と唇が零距离になった。

そうしている事数秒。どちらからともなく唇を離し、照れたように俺も春奈も頬を染めた。

「凄くよかったね。パパも春ちゃんも」

「俺は恥ずいだけだったぞ」

「恥ずかしかつたけど、桜の花びらが舞う中で結婚式なんてロマンチックだったね」

春奈はうつとりしながらさっきまでの簡易結婚式を思い出しているようだ。

桜はそんな春奈を優しげな表情で見つめ

「ん……もう思い残す事はないかな」

「もう……行くのか……?」

「……………うん……………」

俺がそう言つと、桜は長く間を空けた後、ゆっくりと頷いた。

春奈ははっとして泣きそうな顔で桜を見つめた。

「も、もう行っちゃうの? やだよ! やっぱりやだ! ねえ、何とかして一緒にいれる方法考えよ? みんなで頑張ればきっと」  
「ありがとう……春ちゃん……………」

桜は春奈の言葉を遮るように春奈の頭を胸に引き寄せ抱き締めた。



「たまにはここに来てね。待ってるから」

「……うん……うん！ 絶対に……また来るからね！！」  
「安心しろ。綾乃達連れてまた来てやるから」

光の粒子が数を増し、体はもう胸まで消えてしまったが、それでも桜は微笑んでいる。

「ボク……パパも、春ちゃんも、みんなみんな大好き！」

「……私も、ずっと大好き！」  
「ああ、春奈の次に大好きだ」

俺がそう言つと、桜は頬を膨らませてちよつとすねたような顔をした。

「んもつ、こついう時は嘘でも一番だつて言つてよお」

「悪いな、これだけは嘘つけねえんだ」

パパらしいなあ、と桜は笑って俺と春奈を交互に見やった。

「さよなら、元気だね。パパ、春ちゃん」

「さよなら、じゃない。また会おう、だ」

「……ぐすつ……そう、だよ……。……また会おうね、桜ちゃん……」

俺と春奈がより強く桜を抱き締めてそう言つと、涙を一筋流しながら桜は最高の笑顔を見せた。

「うん！ また会おうね！！ パパ、春ちゃん！！」

そう言つて、桜は光となって消えていった。

それが俺にとって桜との、二度目の長い、長いお別れだった。

今度は泣き別れじゃなく、笑顔で再会を約束して。

「行っちゃったね、桜ちゃん……」  
「ああ……そうだな……」

一通り落ち着きを取り戻して、春奈は桜の木を見上げて呟いた。

桜が消えたからか、桜の木は元の葉桜に戻っている。

「なあ、春奈」

「ん？ なあに？」

「毎年の春にはさ、ここでお花見しような」

「うん、そうだね」

まるで嬉しいがるかのように桜の木が風でざわざわ揺れる。

「ねえ……潤君はどこにも行ったりしないよね……？」

突然、春奈は不安げに俺を見つめてきた。何を言ってんだか、と呆れる。

「当たり前だ。俺はずっと春奈と一緒にいるよ」

「うん……えへへ……」

幸せそうに微笑む春奈。俺はいつもこの笑顔に支えられてきた。

と、そんな事を考えていると、春奈が近寄ってきた。

「ねえ、潤君……。もう一回キスしてもいい……………?」

「ああ、俺もそう思ってた」

そう答えて、俺と春奈は桜の木が風に吹かれ囃し立てる中、唇を重ね合った。

桜が残した最後の奇跡か、桜の花びらが風に乗って空高く舞い上がっていった。



## エピソード

桜とお別れしてから一年近く経った。

あの時、簡単でも結婚式をしたからか春奈は人前でもベタベタしてくるようになった。

そのおかげである三人による攻撃もエスカレートしていき、毎日が死と隣り合わせだったように思える。

桜が咲き誇る季節が巡ってくる度に俺は桜を思い出す。

もはや花見は我が家の恒例行事となっている。

一年も過ぎると、俺は学校を卒業してエスカレーター式で附属の大学に行く事にした。

春奈達も同じように大学だ。

雪華だけはまだ高校生だが、附属なので今までとあまり変わらない。

大学に入っても俺と春奈のイチヤつきぶりは変わらず、むしろますますひどくなっていった。

そうになると、綾乃達もはや呆れるしか出来ず、俺に攻撃してくる事はだんだんとなくなっていくた。

そうやって、みんなで楽しく過ごしていくうちに、あっという間に五年の月日が流れ

「お嬢ちゃん達、こんな所で何してるの？」

「かぞくでおはなみにきてるのー！」

「おねーさんもピクニックですかー？」

四、五歳くらいの二人の女の子が笑顔で答えた。

純真無垢、天真爛漫という言葉がぴったりの笑顔だ。

「ここはパパとママのおもいでのはしよなんだって〜」「たいせつなひとと、ながいおわかれしちゃったんだってききました〜」

「そうなんだ。二人共、パパとママは好き？」

少女の言葉に二人は大きく頷いた。

少女は優しく二人の頭にポンスと手を置いた。

と

「美桜ちゃん！ 春咲ちゃん！ ご飯にしよー！」

向こうから母親らしき人が呼び掛けてきた。

女の子二人は元気よく母親の元に走っていった。

「よかった。パパも春ちゃんも元気にしてるみたい」

少女がそう呟いた次の瞬間、一陣の風が拭いた。

風は桜の花びらを乗せて高く舞い上がっていく。

風が止んだ時には少女の姿はなく、そこには大きな桜の木が立っていた。

## エピソード（後書き）

今まで読んでくれた皆様、ありがとうございます！ 苦節二年。「孤独からの救い」から始まってようやく終わりました。途中で諦めようと思ったことも何度もありました。だけど、以外とアップしてくれという要望が多く、ネタを絞り出して書き上げました！ ですがこれからの美姫編以降はしばらく休止です。その代わりハピネスマジック書きます。最初から書き直しで。もっと面白くなるよう努めますんで応援よろです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1737c/>

---

夏に吹く春の風

2010年10月9日08時00分発行